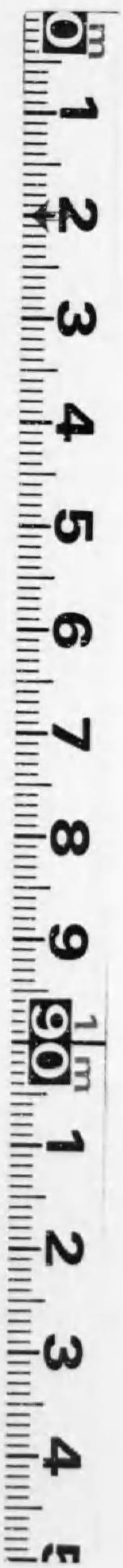


504  
179

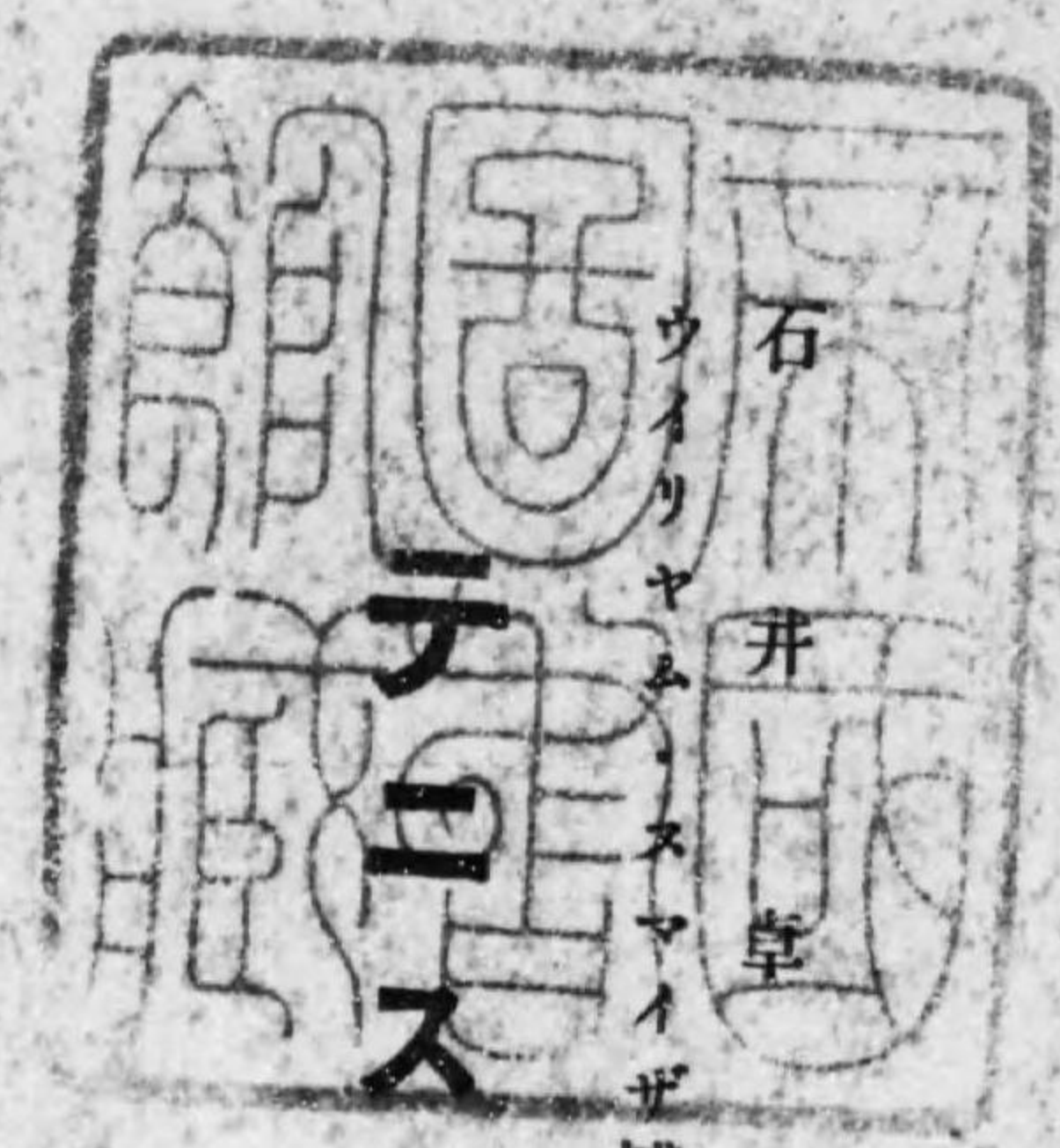


始



角 2-225

504-179



石井 爾 博士 著  
 テニス  
 の 宗教 思想

大正  
 12. 5. 5  
 内交

TO MY READERS IN JAPAN:

I am very glad that my friend and former pupil, Professor Ishii, has translated into Japanese my little book on the religious poetry of Alfred Tennyson. First, because I am delighted to contribute anything I can, however insignificant it may seem to be, to the unity of thought and purpose that binds the people of Japan and my own country in friendly co-operation for mankind. And, second, because I find in the religion of Jesus Christ the only hope of the world for peace and brotherhood.

Of this religion and its ideals much of the poetry of Tennyson is a fine interpretation. Born of the hopes and fears of an age of doubt, it is nevertheless "of all time" in its interpretation of the dearest hopes of the race and their fulfillment in

"That God, which ever lives and loves,"  
as revealed by Jesus, and that  
"One far-off divine event,  
To which the whole creation moves."

Sincerely and affectionately,

THE AUTHOR.

Delaware, Ohio,  
July 4, 1922.

基督教興文協會の事業は、日本の基督教徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミツシンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

## 著者の序

本書はある單一な企畫——即ちテニスンが彼の信仰の根本原理を表白してゐる詩歌をとつて、之を出來得る限り簡明に直截に説明して見ようと云ふ企畫のもとに、著はされたものである。これ等の詩歌を説明するに當つて、私はテニスン自らが時々彼らに加へたあらゆる註釋を利用し、また彼の云はんとしてゐる所を解明するに役立つ同種類の他の詩歌の部分を借りることも忘れなかつた。そしてそれを知ることが、讀者をして一層よく彼の哲學を理解し、その意義を充分に把握せしむることが出来ると思はれる時には、常に、それらの詩歌の制作を促しその内容を定むる因となつた所の、當時の思想界の實狀や彼の生涯の境遇と關聯して之を説明しようと努めた。然し私は常に、私の個人的な見解を讀者に強制しないで、テニスン自らをして、彼の文辭と寫象を通じ、直接に讀者の意識に語らしめようと努力した。

テニスンの哲學を、主義或は信條と云ふ如き、明確な狭い範圍に組成せんと企つる

## TRANSLATOR'S FOREWORD.

The translator feels it an honour to present this work to the public, not only because the author was his teacher who taught him to love the best in literature, but also because he is convinced that the book contains a special message for all Japanese admirers of Tennyson.

Where thoughts repeat themselves, passages have been abridged but not to the extent of altering the original meaning. In so far as is in harmony with the original, the modern Japanese has been used. Considerable difficulty has been experienced by the translator owing to the fact that the author has freely woven a great number of quotations from poetry into his work. Any criticism intended for a better understanding of the book will be highly appreciated.

Many thanks are due to Mr. Masaru Shiga without whose generous and untiring assistance in preparing the manuscript this translation would have been practically impossible.

TAKUJI ISHII.

Kobe, October 9th, 1922.

ことは——特に、こはテニスン自らなすことを拒んだものであるが故に、そしてまた詩なるものは、宗教と同じく、想像と感情の世界に屬して、單に論理力の世界に屬すべきものに非ざるが故に——その企は、テニスン並に彼の詩歌に對して一の非禮を犯すものとなるかも知れない。こゝに私は此の小冊子が、かゝる罪を全く犯さざらんことを望むものである。

ウィリアム・エマリ・スマイザ

(尚、本書に引用したテニスンの詩句は、マクミラン會社一九〇〇年發行の  
グロープ・エナクションに據つたものである。)

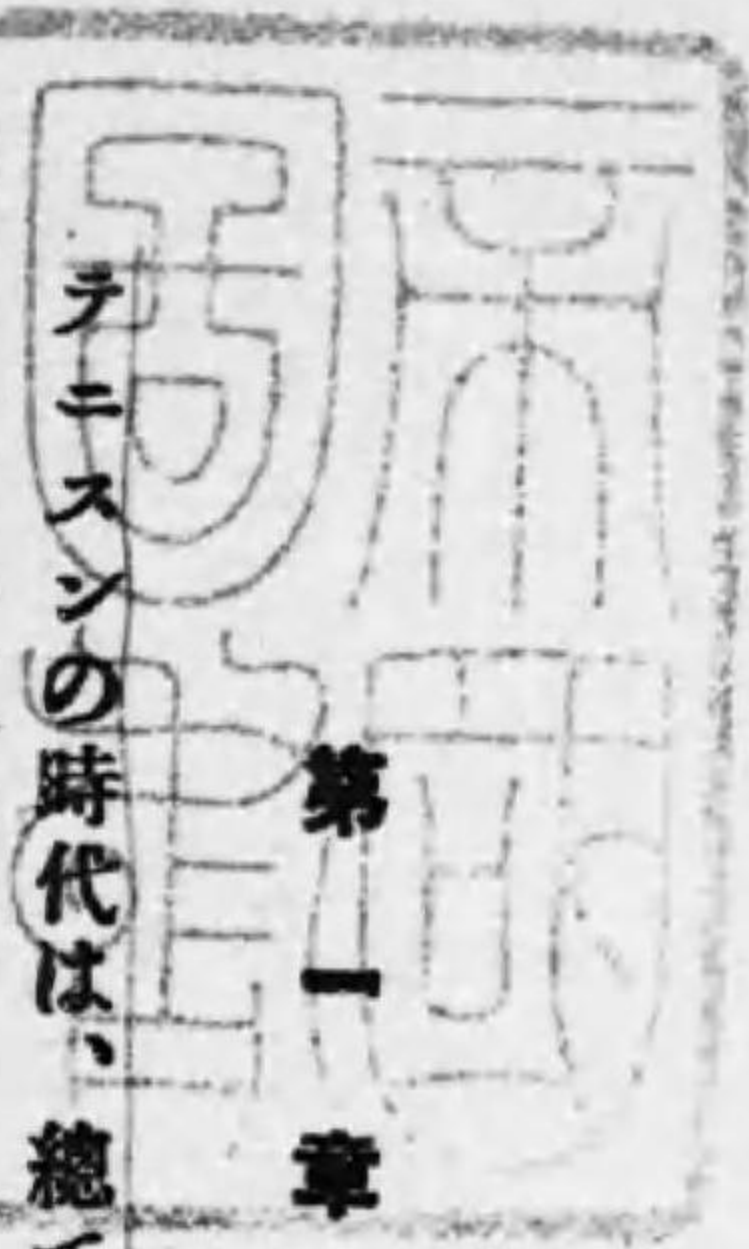
## 内 容

著者の書簡	.....	一頁
著者の序文	.....	二頁
譯者の序文	.....	一頁
第一章 テニスと彼の時代の宗教運動	.....	一
第二章 「イン・メモリアム」——精神的苦闘の記録	.....	三六
第三章 唯物論に對する答	.....	二〇六
第四章 テニスの哲學の倫理的及び社會的關係に就て	.....	一九
第五章 「アルヂルズ・オブ・ザ・キング」の靈的象徴	.....	二四六
第六章 信仰に關する最後の諸篇	.....	三四二
索引	.....	二頁

# テニスンの宗教思想

ウイリヤム・スマイザ博士著  
石井卓爾譯

## 第一章 テニスンと彼の時代の宗教運動



テニスンの時代は、總て信仰に關する事柄に根深い不安の感ぜられた時代であり、  
精神的不満の強かつた時代であつた。此の不安は、一面より見れば、科學的探究によ  
つて既知の世界が絶えず擴大せられ、それに従つて信仰が動搖する様になつた爲であ  
る。特に此の知識の擴大と云ふことによつて、信仰の基礎が「教會」なるものに現は  
されてゐた教理の權威から去つて、直に人間内心の自覺の中に立つ、一層高く力強い  
權威、即ち感覺智能を超越し形式信條より獨立せる内心の證明に依らんとするに至つ  
たが爲である。また他面より見れば、此の時代の精神的不満は信仰の對象及びその運

由に關する上述の如き困惑より生じたばかりでなく、それよりも更に、その當時の人々、殊に一八三〇年代の初めに、テニスンと共に成年に達した年輩の人々が、英國教會並びに他の教會の信仰に當時現はれてゐた如き種類の基督教は、人間社會のあらゆる方面に一の活力として作用する宗教を持ちたいと云ふ當時の人々の憧憬を到底満たす事は出来ない」と云ふことを、卒直に認めたとことに起因するのである。

然し此の不滿——この思想の動搖、精神の不安が結局却つて英國國民の宗教的意識を著しく擴大することに貢獻することゝなつた。そしてその結果は宗教を以つて天上界の幸福な靈的生活に入るべき準備を人々に與へると同時に、この地上の生活に於ても、之を以て人々の社會的及道德的狀態を改善しようとする熱心な繼續的努力となつて現れる様になつた。

かかる宗教的變遷の歴史に關しては、テニスンの詩歌は、藝術の領域に於ける麗はしくして而も含蓄深き一の記録である。その時代の宗教的活動の大部分の困憊せる状態と徒勞な結果とは就いて、彼は生々とした驚くべき繪畫を造つてゐる。彼の時代の

宗教的狀態に現れた殆んど總ての傾向によつて、即ちその不安や不滿やそして擴大せられた信仰によつて、彼は深くも感化せられた。そして更に今度は彼自身彼の時代に深い感化を與へて、その絶望に對する奮闘を援け、之を導いて終に安固な精神狀態に達せしめ、更に潑刺真摯な宗教生活に對する熱望を抱かしむべく力を添へたのである。その時代に於ける最も俊英なる多數の人士と同じく、彼はその壯年期の初めの頃國內到る處に充滿してゐた懷疑と不滿の空氣とを呼吸した。そして其時代の人々の多くと同じく、彼は己を窒息せしめんとする濃霧を打ち開いて、正直なる懷疑の中に宿る一種の信仰を獲得し、その人々の爲に唯一の聲となつて、人々に共通する靈的苦闘の物語と、その苦闘の結果辛くも獲得せられた信仰の原理とを、不朽の詩歌のうちに述べた。また彼は靈感を受けた祭司また豫言者として、眞理を自己に啓示せられたまゝに受け入れ、それを懷疑に沈める動搖時代の熱心な聽法者に宣へ傳へたのである。

更に吾等は考察の歩を進めて、斯の如き海洋の搖蕩波瀾の原因となり、テニスン生時の人々の精神的航海を困難危険ならしめたその暗潮と暴風の正體に就いて考へる必



要がある。何となれば、若し吾等にしてテニスンがその時代に對して盡せる奉仕の性質と彼の宗教的使命の意義とを知らんと欲するならば、どうしても、彼の詩の發生を促した事情と、そして少なくとも或る程度までその詩の表現を支配した諸種の影響とを觀察せねばならぬからである。

先づ教會——宗教の權威の具體的な象徴であり、信仰の貯藏所たるべき教會その物に就て云へば、その聲は聽衆に服従を説得し或は之を強制する力を既に幾分失つてゐた。財産特權或は威嚴の所有に安んじて、教會は何時か徒に優雅平靜なる世俗的安逸に沈溺し、爲にその牧師僧正達のある者は彼等の義務の神聖にしてその使命の嚴肅なることに對する觀念を失つて終つた。彼らは確に基督教的紳士に相違ない——彼等は修養ある上品な人達であつて、その居住した町村の有力者であつた。彼らの家庭は當時の英國教會の最も優秀な美點と認められてゐた質素清純な家族生活の中心であつた（注意すべきはテニスンも亦かゝる英國の牧師館の一つに生れ且つそこで育てられたと云ふことである）。しかし唯彼等は精神的情熱にはあまり觸るゝ所がなかつたの

である。勿論當時の教會の或物にあつては、聖壇の燈火は常にかゞやかに燈され、その僧侶は篤信で親切でその教區の務めを盡すを孜孜として怠らなかつた。例へばマリ・ヘアとその周圍の男女の人達（中にもヒーバー・ヘア・スタンリ）の物語の如きは、その信念と献身に於てまた清純と敬虔とに於て、如何なる他の物語にも増して吾らの追慕の情をそゝるのである。今日に至るも尙、レヂナルド・ヒーバーのゆかしき面影はホドネットの牧師館にまつはり、その花壇に、庭園に、快き散歩路に、緑なる門に、彼の姿は偲ばれる。彼は文學の嗜好に富んでゐて、その性質よりすれば、他の當時の一部の僧侶達と同じく非活動的な牧師となるのが自然だと云はれてゐる位である。然し彼には「義務が喜びであり、信心が本能である如く見えた」。そして彼は「日その教區の人達の中に立交り、艱難に際しては助言を與へ、災厄に當りては慰めを與へ、その身の危険を顧みず、屢々彼等の病床にひざまづきて祈り、必要と認むる時は説諭を加へ、獎勵を與へ或は之を叱責することもあつた。争あればその仲裁者となり、窮乏せるものに對しては惜みなき施與者となつた」と傳へられてゐる。更に又オ

「ガスタス・ヘアの美しき物語をば、彼の不時の死の後その夫人によつて記述せられた書にて讀み、オールトン教區の人々の小さな群に對して彼が自己献身の生を送つた平和な五年間の話を知るときは、誰人も、彼がその憐れな人達に暫しでも慰めを與て自ら如何に喜びを感じたか、彼らの利害——その精神的及物質的の幸福に彼が如何に自分の心を悩ましたか、更に又彼のその力強い卒直な傳道が如何に彼らの中の最も心鈍い者の眼をさへ醒して「ヘアさんは私達の魂を救ふことをほんとうに望んでゐらつしやる」と感謝の言葉を出さしめるに至つたか、すべてかゝる事實を決して忘れることが出來ないであらう。

然し右に擧げた様な人達は當事の一般の僧侶の中では珍らしい例外であつて、暗黒な淋みしい繪畫に一點の光彩を添へた様なものであつた。スタンリーの前にオールダリに居た僧侶は「貧乏人の家を未だ嘗て見舞ふたことがない」と云ふことを誇にしてゐた。ヘアに依れば、オールトン、ブライオースと云ふ近隣の教區の住民は恰も牧者を有たぬ羊同様であつた、彼等を預る牧師は僅三週間に一回宛遠い所から廻つて來て教

會の禮拜を執行するだけであつて、その間は彼等の事を全く忘れて終つてゐる様な有様であつた。當時英國各所の教會の中には悲しむべき程に荒廢したのもあつた。

教會が、斯の如く遲鈍無感覺の状態に陥つた以上、テニスンと同じく十九世紀の初めの二三十年の間教會の懷に養はれた眞摯熱烈な青年の多くが、その教會に對する親愛な情を捨て之に忠實に奉仕せんとする念を失つたのは極めて當然のことである。又かの暴風が襲來して彼等が心靈の暗黒な昏迷の眞中に立つに至つた時、教會に避難してそこに精神的指導を受けることを躊躇したのも亦當然と云はねばならない。テニスンが教會に對して如何に烈しい憤りを持つてゐたかと云ふことは、彼の初期の作にかゝるソネットの一つにその一端を現はしてゐる。それは「ジエイ・エム・ケイに」と題された詩であつて、その中に彼はその友ケムベルを呼んで

ルーテルの生れ代り、戦ひの祭司、

彼は主の饗宴より強慾なる教會のやからを追ふ

A latter Luther, and a soldier-priest

To scare church-harpies from the master's feast ;

と云ひ、更に彼は、

蝕みし經論書より搾り取れる

古き言葉を力なくつぶやく説教僧にあらず

no Sabbath-drawler of old saws,

Distill'd from some worn-canker'd homily,

して

講壇の上に唸る睡たき聲に耳かたむけて

神の貴き安息日の半日を費すを厭ひ

hating to hark

The humming of the drowsy pulpit-drone

Half God's good Sabbath.

寧ろ「閃電の矢を暗黒に放たん」ことを欲すると云つてゐる。

英國教會の實狀は之を「遲鈍」と稱するも尙足らざる位であつた。この教會は人々の深い精神的要求に應ずる用意を缺いてゐたばかりでなく、當時の宗教思想の世界に特にまつはつてゐた精神上の困難を理解する能力も持たなかつたのである。教會の運命の決せらるゝ日は已にその上に迫つてゐた。その礎はその獨占的な政治上の權利や特典に反對する人々の攻撃の爲に、否それよりも更に、その大切な教義を破らんとさへ思はれたる科學的眞理の次第に勢を増す壓迫の爲に、漸く崩壊しつつあるが如く見えたとであつた。然るに教會はその宮殿の中に蔓つた弊風を矯正せんとせず、又自己の傳へ來つた眞理を新時代の思想と調和せしめんとも努めず、徒らに「教權」と云ふ古い武器をとつて時局に當らんとした。然も結局その手にとりし武器は到底無効なることを認めざるを得ない破目に陥つた。猛り立つた青年達の眼には、今や教會は不正、抑壓、非理の味方をするものとしか見えなかつた。

しかのみならず、かの自由探究の精神は、十八世紀に於て、獨斷的宗教の頑迷な反抗をかへりみず、空間の無限なることを説いて之を望遠鏡を以てするも達するを得な

い範圍にまで擴大し、更に人間の脚下からその踏める固き大地をも取り去つて終つたが、此の精神は今や十九世紀の初頭に當り、時間なるものも亦無限にしてかの所謂天地創造の時代及び人間發達の歴史を遠く超越してゐることを明にしたのである。即ち天地創造なるものは或る人が聖書によつて解釋するが如く一の突然な行爲でなくて、幾百萬年の永い過程を経て漸次に形をなして來たものであり、又生命なるものは最近に發生したものでなく、到底人智を以て測るべからざる遠き時代に既に存してゐたのであつて、人間自身も普通傳説の中に彼の發生の時として記されてゐる年代より遙に以前から存在せると古きものであることが、明になつて來たのである。かくて兩者の戦闘が漸く終局に達し、戦塵が地に收つた時には、教權の砦は悉く崩壊したるが如くに見え、その礎とせる聖書無謬の教説は見る影もなく打ち破られて最早何等の持久力もないが如く見えた。更に、ニューマンやかのオクスフォード運動の首領達がこの自由探究の精神に對して獨斷的教義の援護に努めてゐた最中に於てすら、科學は「神の計畫」なるものを出發點とせる古來の神學説を打ち破つて、之に絶對的否定を與へ

てゐた。即ち、是まで神の計畫の結果であると考へられてゐた種々の例は、實際は只單純な物理的原因による作用に過ぎないことが主張せられたのである。そして神の存在なるものは、宇宙の現象の何れを證明するにも全く不必要なることが斷言せられたのである。

革命の主義と新らしき科學の教へに對する教會の反抗は、その結果永い間の激烈な論戰となつた。そして此の争闘が行はれてゐた期間、多くの靈的勇士の間に、疑問と失望とが相ついで起り、彼等は底知らぬ淵の端近く身を置いてその顔の色を失つてゐた。その淵の暗い底からは唯かの

神なき深みに崩れ倒れ

とこしへに碎け散る磯波の音

an ever-breaking shore

That tumbled in the Godless deep.

のみ耳に傳はつて來るのであつた。テニスン自身も亦實にかゝる深い悲哀の眞中に立

つたのであつて、而もその時彼は友ハラムの急死によつて當時の懷疑と懊惱とのすべてを己の身に味うことゝなつたのである。事實一八三三年から一八五〇年の間に作られた彼の詩の大部分は、この悲しき出来事によつて掻き亂された心から生れた様々の暗い影に對する彼自らの反抗よりして生じたものである。二つの聲ツヴァイ・ヴェイセ（一八三三年）の中には、次の如き執拗な問が發せられてゐる。

かくも汝は禍に包まれてゐる

寧ろ死を勝れりとは思はないか？——

Thou art so full of misery,

Were it not better not to be? ——

彼はこの問に對する確な答を見出すことが出来なかつた。唯それに次ぐ第二の聲の中に微かな望が囁かれたために、その美はしき聲音によつて第一のかの「暗き」聲はやうやく沈黙させられるのである。「イン・メモリアム」も亦その初めの部分は、懷疑と精神的苦闘とより生ずる激情に満ちてゐる。そして終の方になつて、テニスンが精神

上の確信の光明と平和に達するを得た後、この詩は初めて宗教的信念を現はす高い調べを奏でることゝなつてゐる。

すべて安し、形式と信仰は、

恐怖の夜のうちに裂き離れんとも。

And all is well, tho' faith and form

Be sundered in the night of fear.

然し一八四九年にテニスンは「イン・メモリアム」の序詩とも云ふべき、抒情詩を書き、その詩のうちに彼の永い間の苦闘の最後の收穫として、彼が悲哀を通じて初めて知るを得たる「神の強き御子、不死の愛」に對する彼の固き信仰を表白したが、一方彼と同時代の諸文士の多くは、精神上の薄明より逃るゝを得ないで終に進んで暗黒の境に陥りつゝあつた。例へばクラツアの如きはその一人である。彼の詩は懷疑と苦闘との精神を有し、而も眞理と善とが最後の勝利を得べきことを固く信じてゐる點に於て當時の多数の人々の思想情操の一般を代表してゐる。彼はその頃オクスフォード

に吹き荒んでゐたかの暴風の中心に捲き込まれ、懷疑と困惑とに捕へられたその心は、かのニューマンが朗かな聲をあげてセント・マリの教壇に日曜毎に説き示す解決を受け納れることが出来なかつた。かくて彼は遂に大學を去り、精神上の烈しい苦悶の惱ましき調べをその詩に歌ひ、かの「ともすれば逃れんとする恵みの光」——逃れてはそを求むる者を「いよゝ苛立たしむる」その光を追ひ求めて而も得る能はず、終にその懊惱の中に空しく死に就いたのである。然し、その深き懷疑思想のもなかにあつても、彼は尙「精神の内なる光に對する清き崇敬と、その導きに對する全き服従」とは之を保つてゐた。マシユー・アールドも亦かくの如き一人であつた。彼はクラツフの友であり、そのオクスフォードに於ける伴侶であつた。彼の胸には「信仰の海も嘗ては満ちてゐた」のであつたが、而も此の當時にあつては、彼は唯次の如き聲を耳にするを得たのみであつた。

寂しく、長く退き行くその叫び、

夜の風の息吹きのままに、

この世の荒れ果てし廣き汀

裸なる礫の上を打ち退くその叫び、

*Its melancholy, long, withdrawing roar,*

*Retreating, to the breath*

*Of the night-wind, down the vast edges drear*

*And naked shingles of the world.*

然しテニソンは、彼の周圍の人々の多數が斯く「不信仰」の荊いばらの中に苦しんでゐる間に、當時の詩人の中に唯一人新らしき科學の發見を受け入れ、之を宗教の永遠の真理と調和せしめた。このことはテニソンの重大な特色であり特に、「イン・メモリアム」の基調をなしてゐるものである。彼の子息ハラム・テニソンは、その追想録の中にかく記してゐる。「父は彼が呼んで、是等の測る可からざる秘密と云つてゐる所の物に對し吾人の取る可き唯一の眞實な靈的態度は謙遜であると云ふことを常に信じ、そして此の態度は、有限なるものは無限なるものを決して把握することが出来ないと云ふことを

知つてゐる者には自然なことであるとなしてゐた。テニヌンの詩を支配してゐるものは、獨斷的でなくて科學的な事物の見方である。それは科學的氣分が彼の平素の思考法を支配してゐると同様である。テニヌンは新らしき科學の知識の爲に却つて靈感を受け、之をその詩人的本能を以つて解釋してよく當時の人々の心に了解せしめた。彼は到達し難き宇宙の神秘を「ひびわれた石垣に咲ける花」の中に認め、又自然のあらゆる現象の蔭に

一つの神、一つの法、一つの根元、  
萬物之を指して進む

また一つの遠き神聖なる終局

One God, one law, one element,

And one far-off divine event,

To which the whole creation moves,

を探り得たのである。

テニヌンが「イン・メモリアム」を書いて彼の時代に貢献したその最も高い功績の一つは、此の點に宿つてゐる。即ち彼は新らしく擴大せられた知識の言葉を以つて宗教の眞理を深く解説し、その或る點に於ては、彼は後世の思想の先驅をしてゐるのである。然し彼のその時代に對する功績の最大なるものは、總ての人々の不安の眞中にあつて、彼が人間にとつて信仰の必要なることを認め、靈的直覺の合理性と價值とを認めた點にある。靈的直覺の存在を信する念によつて、テニヌンは彼を閉ぢ籠めてゐた濃霧から逃がれて廣々とした青空と星の姿が仰がれる澄明な雰圍氣の中にはいることが出來た。そして勞苦と煩悶の後清い空氣を呼吸するを得た他の人々に對して、その豫言者となり精神的指導者となつた。フラウド氏はその當時に於ける自己及び他の人々の状態や經驗に就いて語り、燈明船は皆波に押流され、羅針盤は悉く狂つて終つて、唯星をしるべに航海しなければならなかつた様な當時の有様を次の如く述べてゐる。「かくの如き状態にあつて、私と同時代の者の中で最もすぐれた最も心の雄々しい人達は、ともかく不眞面目と云ふことを捨てて終はうと決心した。そして自分自身の足

の下に地盤を見出さう、不確實な物は、正直に不確實な物として放つて置かう、そしてどれ位彼等が自分で眞實であると認め得る物があるかを調べて見よう、そしてその眞實な物だけを信じ、之に従つて生きて行ふと決心した。テニスは此の感情を詩に發表し、カーライルは……散文に發表した。……吾々は彼の詩を熟讀して心の奥底に浸み込ませた。實にそれは吾々自身の胸の中に動いてゐた種々の感情をすぐれたる言葉を以て表現したものに外ならなかつたのである。」

テニスが少年時代を過した境遇は實に幸福なものであつた。彼は早熟的に思索上の苦惱を受くることなしに成長した。彼の父の家庭の感化は彼の中に清淨質實な人格を育てあげた(英國の牧師館はこの清淨と質實と云ふ點で當時有名であつた)。更に彼は慥にその父——牧師たるべく眞の使命は受けてゐなかつたが、而もその義務を盡さん爲に忠賢に努力し神學に就いても同時代の人達より随分進歩した意見をもつてゐた父——から、宗教的思想に對する特殊な態度を譲り受けた。テニスはこの態度によつて、「信仰形式以上の信仰に取りすがり」、更にこの信仰を新らしき知識に適合して

表現し得たのである。しかのみならず、彼の幼年の時代即ちかの宗教論争の混亂を極めた潮流がまだ彼の信仰の綱に緊張を與へてゐなかつた時代に於てさへ、テニスの意識には早くも眼に見えざる物の實在の姿が深く感ぜられてゐた。その感じは最初は唯漠然とした思想の連鎖に過ぎなかつたであらうが、此悲哀の壓迫を受くるに至つて發して一個の光明となり、彼の哲學の倒壊を救ふ原理となつたのである。テニスの年少時代には、

「己れ」なる一時の限界はほどけて

「なづくべからざる物」の中に入り行きぬ、

恰も雲の空に溶くるが如く——

The mortal limit of the Self was loosed

And past into the Nameless, as a cloud

Melts into heaven,——

と歌はれてゐる様な場合、また彼自ら「言葉もてそを譽稱せんも難し」(unsadhuwable



in words)と云つてゐる様な経験が幾度かあつた。その経験はかく漠然たる様であつて而もそのうちに深い眞實性を有し、後ち彼が物質主義の猛烈な勢力の眞中に立つたとき、彼をしてあくまで宇宙の靈的解釋を固執せしめ、靈的直覺の眞實なることを證明して、之を否定せんとする科學の論理的方法を反駁せしめたのである。

テニソンは「目覺めたるイギリス」の上にまさに明けかゝつた新らしき日の空氣を呼吸しながら、一八二九年ケムブリヂへ遊學の途に就いた。彼は時代の大なる昂奮に合して自己の脈搏の高鳴るを感じた。まことに彼の詩「ロックスリ・ホール」の如き、その大部分は此の世紀の曙の望に燃ゆる熱情によつて鼓動してゐるのである。勿論彼が入學したとき、ケムブリヂ大學はさまざまの動搖せる思想の中心であつた。然しその信仰の不安定は、後一轉して更にその宗教的情調を高め、正に英國の全土を蔽はんとするより廣き基督教を豫言するものとなつた。テニソンの擔任の教師はヒューウエルであつた。彼はセヂェウイックと同じく物理學界に屬する人で、どうしても創造の歴史に關する聖書の狹義な解釋を廢棄せねばならぬ様な研究に従つてゐたのであるが、

而も彼は同時に、聖書はよく人間の心の最も高い希望と最も強い要求に應ずるものであると云ふ理由の下に聖書の權威を主張してゐる。しかのみならず、コールリヂの哲學は、宗教思想界の高級な方面に於ける一の強い勢力として、ケムブリヂ大學の全體に普及し、當時テニソンの級友であつた、フィツヂエラルドの言葉によれば、「吾々の總ての觀念を改造しつゝあつた」のである。コールリヂのケムブリヂに於けるこの勢力は「使徒俱樂部」によつて永續的に保たれんとしてゐたが、テニソンもこのクラブの初期の會員であつた。このクラブはテニソンが入會する數年前にモウリスに依つて創設せられたもので、モウリスは彼が不信仰に陥ることを免れたのはコールリヂの力によることの多いのを自認してゐる。またハラムはモウリスに就いて、グラドストンに贈つた手紙の中にかく記してある、「彼が唯使徒協會の創設と云ふ仕事だけで（同協會の形式はともかくその精神は慥に彼が造つたのです）。ケムブリヂの多數の人々の心に與へ得たその影響はどれ程だか、とても思慮することも出来ない程です。そして吾々の次の時代にも直接間接にその影響は及ぶだらうと思ひます。」以上の如き種々な影響

のもとに、テニスンは既に自分の経験によつて證明せられてゐた、哲學上の主義を更に新らしく授けられた。そしてその主義は、後日懷疑の颶風に會してその眞價を表はし、宗教論争の時代の暗黒な不安の唯中にありながら、テニスンをしてよくその信仰に忠なるを得しめた。

テニスンはその頃より既に宗教に關して獨立した自由な思考を爲す傾向を持つてゐたのであつて、この傾向がその後數年にして「イン・メモリアム」の詩中に現はれてあの廣大な革新運動の精神の詩的表現となり、モウリスや、キングズリヤ、ロバートスン等が、その説教によつて教壇より叫んだ所と同様の叫をあげたのである。

然しながら、テニスンの世に傳へた宗教的思想の最後の完全な表現のあらはれてゐるのは「イン・メモリアム」の中ではない。この詩は勿論人間の運命と闘へる靈魂の勝利の記録として意味深いものであり、また「人生に必要なが故に人間の到底破壊し讓渡し能はざる最小限の信仰」を示してゐる點に於て、その時代の人達に靈的眞理を直接に啓示する偉大な力をもつて現はれたのであるが、而も之をテニスンの詩の全體よ

り見れば、只此の詩人の豫言的教訓乃至、宗教哲學の一方面を吾人に示してゐるに過ぎない。彼の有する信仰と宗教的眞理の全體は、彼が一八五〇年以後科學と宗教との間の未曾有の烈しき衝突の壓迫のもとに、書いた多くの詩の中に初めて遺憾なく現はされてゐるのである。その當時地質學界に新たに起つた進化論的學説は、古代の人間と地球とに關する聖書の記事に矛盾するものとして反對せられてゐた。然るに更にダーウインの「種の起源」(一八五九年)が發表せられるに及んで、それは直接神又は精靈に對する總ての信仰を顛覆し、従つて基督教そのもの、中心眞理をも攻撃せんとするものと思はれた。實際當時の人達は、若し此の進化論が一般に是認せられるに至つたならば、基督教は全く滅亡の外はないと信じたのである。この時テニスンは、進化論の物質的論旨に反抗して、信仰の地歩を支持し、進化なる事實を生命に充ちた熱烈な信仰の言葉を以て解説し、彼の時代にその最大の奉仕をなした。

人間は少なくともその物質的性質の範圍内では長き進化の過程の所産であると云ふ原理は、常にアダムは地の塵より造られイブは彼の肋骨の一つから造られたと云ふ聖

書の物語に矛盾するばかりではない。その説は更に進んで、人間と云ふものはたゞ、純粹な物質的原因の作用によつてこの世に存在する様になつたものであり、従つて宇宙には彼より高等な存在物はないとも考へ得ると云ふことを人間に示したのである。かくの如く暗示せられた恐るべき選擇、「總て清き一つの神の默せる心の中に」先づ描かれたる世界と、神なき世界と、その何れを選ぶべきかと云ふ恐ろしい意味をもつた選擇。この選擇に迷つてアーノルドは「イン・ウトルムケ・バラトス」かの——懷疑的苦悶に満ちた詩を書いた。又一方スウインバーンにあつては、「最も嚴密に物質的な合成物が、最も光輝ある色彩に包まれてゐる」。即ちそれは彼が「灰色の年の初め」を歌ひ、「事物の初まる薄明」を歌ひ、更に「小兒なれど而も夜より生れし小兒ならず人の母にして而も己は母を持たざる」この大地を歌つてゐる所に現はれてゐる。人間が宇宙の燦然たる光景の前に如何に微小であるか、自然の永遠の力の前に如何に無に近いか、はたその情熱や野心の空しさ、その生の短かさ——すべてかゝる題目を彼は美と優雅を以つて歌つてゐる。

吾等は終にリーシーの河水を飲んだ、吾等はロータスの草を喰んだ、起りては消え行く悲みの數々、こゝにして如何で吾等を損ひ得よう？  
吾等を愛せし夢にまた吾等を惱ませし恐れに吾等は既に告げた、  
おやすみなさい、左様ならと。

We have drunken of Lethe at last, we have eaten of Lotus;

What hurts it us here that sorrows arise and die?

We have said of the dream that caressed, and the terror that smote us,

Good-night and good-bye.

然し總てかゝる唯物論的な思想に對して、テニスンは敢然と反抗した。彼はその信ずる所に従つて、人間が宇宙を道徳的支配を有しないものと観ずるとき彼等が必然の結果として陥らねばならぬ絶望の状態を赤裸々に叙述し、また天地創造の道徳的秩序と目的を信んずることが如何に人間の暗黒な疑問と苦しい恐怖を取り去り得るかを示した。かくて彼の想像力は様々な難題の全部に觸れ、そしてそれを解明した。それらの

問題の多くは、それを究むるときは、形而上學に深くはいらねばならぬものであつて、即ち惡の起原と意義、自然の表面に現はれたるその浪費と無目的（若し靈魂なる物ありとせば）、靈魂の起原と其の不滅、靈魂と神性との關係、並びに人間の肉體的性質と精神的性質との間に存する相互關係、と云ふ様なものに關する諸問題である。テニスの晩年の宗教的詩歌は即ち之等の問題を取扱つたのであつて、茲に彼は當時の懷疑的苦悶の眞中にあつて大なる希望を歌ふ人として、人間を微小なりとする觀念又人間の脆弱に對する嘲笑の眞中にあつて人間の高き運命に對する望を失はない詩人として、更に誤解せられたる科學の唯物論に反對して宇宙の本質を爲す精神の存在を述べる豫言者として、その叫をあげてゐるのである。

然し以上の如く、宗教に關する思想及び信念の世界に種々の運動が勃興してゐる間に、他方宗教の實踐と云ふ方面にも同様に著しい變化が發生しつゝあつた。一般的に云へばこの變化は人間性ヒューマニティに對する熱情として現はれたと云つてもよい。即ち人々は、社會の組織に滲透し人間百般の行爲に活氣を興ふる一の生々した方として、基督の精

神を廣く實踐上に活用せんとした。またそれは人間相互の同情を増し人生の様式を氣高くし禮儀を美しくし、法律をより純一にせんとする努力となり、又古來の惡弊を廢し、貧窮と罪惡とを防遏せんとする活動となり、殊により高い文明の黎明を待つ人類の希望となつて現れた。その文明の境地に達すれば、人は皆

己が幸福を萬人の幸福の中に見、

萬人皆貴き協和の中に働くを見る

And his own in all men's good,

And all men work in noble brotherhood.

のである。

かゝる精神は或る場合に於ては、不可知論的科學の思索から生じて、一個の明確な宗教上の主義となり、かの廢棄せられた信條にとつて代る様になつた。例へばジョージ・エリオットの書いた物などには、この方面の思想が深く麗はしく表はれてゐる。彼の女はハリエット、ピーチャー、ストー夫人に送つた手紙の中に「人生を淨化し向

上せしめんとする願望に結び合つた人々よりなれる包容的な教會、そこでは總ての小教會の優良な會員が些少な相違を忘れて互に兄弟姉妹と呼び合ふ様な教會」と云つてゐるが、彼女は常にかゝる教會の存在し得ることを示さんとしてゐた。この教會に於ては神の神秘の力と云ふものもなく、天の導きと云ふものもなく、神聖な光と云ふものもなかつた。唯

人間の協和を強むる精力となるもの、

相傳へて次第に完全なる人間性を造らんとする

向上的遺傳に外ならざる力、

as turns

To energy of human fellowship ;

No powers beyond the growing heritage

That makes completer manhood.

のみがそこにあるべきであつた。✓

然しながら、また他の場合にあつては、此の新らしい博愛の精神が、教會の内外を問はず、神に對する信仰と離れないであることもあつた。尤もそれは多くの場合、教會が人間の心の最も深い欲求に應ずることが出来ない爲に、誰人もそれに對して感じた不滿の一の自然な反動として現れたのに相違なかつた。即ちそれは宗教の中に現實を得んとする欲求である。それは表面的な美辭を捨て、人間の最も深く、最も神聖な思想感情を直にそれに適應する行爲として現はさしむる様な宗教を求めたのである。例へばカーライルの教への基調をなせるものは大體に於てかかる精神であつた。彼の言葉は幾萬の喇叭の聲かの如く當時の青年の耳に響き、殊にロバートスンやチャールス・キングズリやジョン・スターリングの心に深い靈感を與へたと云はれてゐる。この精神はまたラスキンが一八六〇年以後になした宣傳の基調をなした。この時機に於けるラスキンの變化は即ちその世紀自身の變化に外ならない。彼は美と藝術とより又過去のロマンスより轉じて、人類に向ひ現在のすべての嚴肅な欲求に向つたのである。ユールリヂも亦、ハイゲートの丘上に聖者の生活を送りながら、彼の詩文と談論とを以て、

基督教を單なる信條から人間活動の生々した様式に改造せんとする運動に、徐々にして確固たる貢献をなした。彼は一八三四年まで生きてゐたが、彼の感化はロバートソン、キングズリーの如き教會内部の人達にも及んだ。そして彼らはグラドストーンが「精神的の光輝」と呼んだかのモウリスと共に、當時英國教會と英國文明の全組織に新しき精神的活力の光耀を與へつつあつたのである。この種々な方面に分れながら、而も常に純正に宗教的な基督教的精神によつて指導せられてゐる大運動に對して、テニスンは終始深い同情を持つてゐた。加之その運動の指導者の或人達とは個人的に親密な交際を結んでゐて、モウリスの如きは彼の長男の教父となつた。イン・メモリアム」に記録されてゐるかの苦闘が過ぎ去つて後、彼はその詩歌の中に、この運動の高貴な意義、日常の實踐に宗教を現實化せんとするその主張、人道的なその目的、人間進歩の精神に對するその傾倒と云ふ様なものを靈感に満ちた筆を以て解説した。多年彼を捕へてゐた悲哀の手から逃れて、彼が再びその詩を作り始めた時、彼は曾て自ら先見したより大なる基督教の豫言者として立つた。彼はまことに彼が成らんと欲

したもの、即ち「より勝れたる樂人」となつた。この樂人は新年の鐘が、

その響もて國土の暗を打ち拂ひ、

新に來たる基督を迎へ入るゝ

Ring out the darkness of the land,

Ring in the Christ that is to be.

を聞かんことを欲するにとどまらず、その鐘を打ち鳴らさん爲に自ら大いなる努力をなしたのである。

アーサー王の死に關するその若年時代の詩に、テニスンが近代的の序跋を添へたことは、前記の如き見地より見て深い意義を有してゐる。フイツヂェラルドの記録によれば、テニスンは一八三五年に彼の友數人を集めて、「アーサーの死」の草稿を讀んだ。この詩はその初めと終に尙新らしい部分を加へて、後「アーサーの崩御」即ち完全な連續詩「アイデルス」の一部となつたものである。この詩は唯純潔真率な一の敘事詩で、氣高い威嚴ある詩語を以て美しい客觀性を附與せられてゐたが、一八四二年此の詩

が初めて公にせられた時には、テニスンは之に序詩と跋詩を附け加へてゐた。それはフ  
イツヂェラルドの言葉を借れば、「古への世の物語を述ぶる理由を説かんため」であ  
つた。即ち一方その序詩に就いて見れば、そこにはクリスマスの夜英國風の爐邊に打  
ち集うた大學の學生の一群がある——この場面はフイツヂェラルドが記録してゐる  
上述の詩の朗讀の事からしてテニスンが用ふる氣になつたのかも知れない——そして  
この一郡の中に一人の牧師がゐて、その當時の宗教に關する主要な問題に睡氣を催す  
様な調子で愚にもつかぬ獨語をさしはさんでゐる。彼は、

ほしいまゝに話題をひろめ、

政府の教會委員のことを絮説するかと思へば、

地質學や教會分裂の事を攻撃する。

*taking wide and wider sweeps,*

*Now harping on the church-commissioners,*

*Now hawking at Geology and schism ;*

そして終には

世界を蔽へる信仰の頽廢、「國內にも殆んど信なく、

國外には全然これなく、錨なく、

とりすがるべき何物もなし」——

*Upon the general decay of faith*

*Right thro' the world, "at home was little left,*

*And none abroad : there was no anchor, none*

*To hold by,"*

その有様を問題にする。まことにそれは當時の盲目的な非進歩的な獨斷論の典型であ  
る。他方その跋詩に就て見れば、その中に歌はれてゐる幻象まぼろしとクリスマスの鐘の音と  
はより麗はしき信仰と効果多き宗教的活動を求めんとする當時の人達のすべての熱烈  
な希望と期待を表現してゐる。アーサーはこの敘事詩に於ては、「アヴェイリヨンの島の  
谷地」へと神秘なる水を渡り行くものとして描かれてゐる。その時彼は次の如き告別

の言葉を叫ぶ——

古きは變りて新しきに所を譲る、  
而して、神は數多き道もてその志を成す。

The old order changeth, yielding place to new,

And God fulfils Himself in many ways.

然しこの跋詩の結果をなす幻象に於ては彼は再び此の土に歸つて來る

アーサー王は容儀すぐれし近世の

紳士の姿をもて現はれぬ。皆人は叫びぬ。

「アーサー王こそ來りつれ彼は死すものにあらず」と。

更に後ろなる丘に立てる者共はくり返しぬ、

「再び來りぬ、その美を三倍して」と。

而して地の奥遠くまで聲々は反響しぬ、

「すべてのよき物を携へ來りぬ。今よりは戦ひも世にあらじ」と。

54 (あり)

King Arthur, like a modern gentleman

Of stately part; and all the people cried,

“Arthur is come again; he cannot die.”

Then those that stood upon the hills behind

Repeated—“Come again, and thrice as fair;”

And, further inland, voices echo'd—“Come

With all good things, and war shall be no more.”

こゝにアーサー王の死去は、古びたる文明の死去を表象するものとなつてゐる。そして彼の歸來の幻象は、クリスマスの鐘の調べと打ちまじつて、人の子の間により高くより善き秩序を打ち建てんとするこの美しき時の始めの人々の深き望みを表象するものとなつてゐる。——即ちこの幻象この希望は、テニスンが之まで屢々その詩に歌ひ來つたものである。



## 第二章 「イン・メモリアム」——精神的苦悶の記録

テニスンが「イン・メモリアム」を書いた時期に於ける一般社會の宗教的動搖乃至精神的不安の状態、また「イン・メモリアム」が一の宗教詩として當時の宗教思想に對して有した關係——是等の諸點に就ては既に前章に之を説いた。それで此の章に於ては、この詩を、先づ彼が懷疑と戰つたその長く苦しい争闘の記録として、次にテニスン自身のみならずその時代の總ての人々が精神的絶望と云ふ強敵と烈しく戰つた後漸く勝ち得た最後の信仰の記録として、この兩様の見地から幾分詳細にこの詩そのものを考案して見ようと思ふのである。

テニスンはその友アーサー・ハラムが死んだ時まで眞の悲哀なるものを全く知らなかつた譯ではなかつた。而もこの友の突然な死は、人間の運命に關する總ての暗黒な疑問を彼の心に注ぎ、ハラムが生きてゐた間は彼等兩人にとつて單に理智上の熱心な好奇心の對象に過ぎなかつた總ての空漠たる疑惑を今や明らかに直接自己の生命に關す

る一の喫緊な問題として提示したのである。テニスンの父は早く既に一八三一年に此の世を去つた。即ちそれはこの若い詩人がケムブリッジを出て、サマスビーの人里離れた静寂の地にまたリンコンシアの丘の間に、その生を送らんとした時期より幾何も経ない頃であつた。其時彼の父の死に對する悲歎は、勿論深く且つ眞摯なるものであつた。然しすべての青年が初めて墳墓の沈黙とその神秘の中に立つ時自然に感ずる様な驚異と畏怖の情によつて、その悲歎の度は幾分緩和せられた様に見える。既に前章にも述べた如く彼は常に想像力に富み見えざる世界の實在に對して強い意識を持つてゐたから、父の死後一週間も経た頃、彼はその亡霊を見たいものだと思つて、わざと父の床の中に眠つてみた。然し、勿論亡霊は現はれなかつた。そして彼は、父の死はまだ少し早かつたが、それでも自然と云ふものゝ普通の徑路により事物の定められた順序に従つて過ぎ去つたのであると考へて、そこに慰めを得たのである。「吾等の最初に愛する者は最初に取り去られる」と、彼は父の死後二年、ハラムの死の少し前に、ジエイムス・スベディングに書き送つてゐる。

神は吾等に愛を與へ給ふ。何物か愛すべき物を彼は吾等に貸し給ふ。  
されど、愛の成長して

熟したる時は、その成長の養ひとなりし物は亡び去り、  
愛のみあとに取りのこる。

God gives us love. Something to love

He lends us ; but, when love is grown

To ripeness, that on which it throve

Falls off, and love is left alone.

彼の父の死の時に書かれて疑ひもなく彼の個人的経験を記録してゐる他の一つの詩  
〔悼める者〕<sup>オレン・メモリア</sup>に於ては、彼は「自然」が如何に悼める者を促して春の野邊に導き行く  
か、如何に「より深き聲」が病める心に「一の廣き意志に従ふ」べきことを教ふるか、  
如何に「希望」と「記憶」が薄明の中に慰めの言葉をさやくか、そして最後に如何  
に「沈黙と打ち震ふ星を通じて」信仰が「未だ誰人も踏みしことなき道より」來るか

と云ふことを説いてゐる。

然し今ハラムの死によつて、是までその底を知らないで過して來た深刻な個人的悲  
哀の閘門が愈々開かれ、その水が彼の身の上に注がれた時、この若き詩人は全くその  
爲めに壓倒せられて彼の之までの碇泊から押し流されて終つた。遠く當時の新思想の  
泉の中にその源を發してゐる懷疑と精神的絶望、更にそれに従つて生ずる信仰の地盤  
の動搖と云ふ、是まで拒ぎ支へられてゐた水流が、今や彼を呑込んで終つたのである。  
新しい未だ探險されてゐない知識の王國から、不安定な危険な歸納法より生ずるさま  
ざまな疑問が、つぎ／＼に來つて彼をなやまし、終に彼は生の中に何等の悦びを認め  
ず寧ろ死を願ふに至つた。生は彼に對してその意義を失つた。

「イン・メモリアム」の初めの部分の抒情詩の一に歌つてゐる如く、生は焔のめぐり  
を飛ぶ蛾の須臾なあてど無き羽ばたきとしか見えなかつた。人は唯「精巧な土細工」  
である。そして墳墓は總ての終局である。愛は決して神聖な精神的原理でなく、たゞ  
肉體的の親和力に過ぎない。——「單なる怠惰な氣分のまじはり」に過ぎない。宇宙

は天空を盲目的に計畫なく運動する諸星によつて編まれた一の縄れあつた蛛蜘蛛網である。そしてその天空自身は一の生命なき廣がりであつて、その暗黒な空虚からは神も既に取去られてゐる——かくの如く、一の精神的苦惱の時期がハラムの死に續いて起つたのである。その暗澹たる闇の中に、彼の年少時代の總ての信仰のうち、その一つだに攻撃反對を受けないで遺つてゐるものはなかつた。唯、死と悲哀の真中にあつても尙愛に取り縋らんとする意志と、このまゝに死せんより（そは遙かに困難なりとも）更に歩を進めて生の戦ひを挑むこそ遙かに高貴であるとする、彼の本來の感情のみはこのこつてゐた——この感情は麗はしくまた眞率にその詩「ユリツシーズ」の中に現はされてゐる。

最初、この心の苦惱の中に於て、この詩人は、「音律ある言葉」の「悲しき機械的な習作」に彼の苦痛を和らぐる或る物を見出して、詩歌の製作にとりかゝつた。矢張この悲しみを忘れんとする氣持にひたつて或る朝の五時頃、リンカンシアの一小路の花咲いた垣根の間に坐り、——然しその思ひは、遠く、波濤の岩に碎けて舟舶の望みの

港に走り行くあたりに置きながら——彼は過去千年の間人類が憧憬の叫びであつた所のものを歌つた。即ちそれは

消え去りし手に觸れんとし、

黙しゐる聲を聞かんとする、

for the touch of a vanish'd hand,

And the sound of a voice that is still.

望みなのである。かくの如く、様々な氣分が彼の心の上を去來するまゝに、短い抒情詩が相ついで作られ、そしてその多數が終に相寄つて一の完全な結合をなし、茲に「イン・メモリアム」を作り上げたのである。四季の様々な變遷、教會に於て死者を葬ふ悲しく神聖なる職務、友情の柱層の上に再び歸り來る聖い年忌の日、かゝるものゝ爲めにテニスの追懐の情は愈々促されて、時としては悲しくまた優しく更にその憤懣と悲歎の思ひは益々勢を増して、その不安なる心に似たる姿は正に「かなたの日の沈む西空より吹き叫び來り」て、「鳥の群を空に吹き散らす」野の風に認めらるゝのであつ

た。かくて是等の物は悉く彼の此の詩の中にとり入れられた。また或時は、彼は嘗てその亡き友と共に遊んだ様々の地を訪れた。即ち彼は今一度かの「長い醜い街」の「暗い家」の側に立つてみた。そこは嘗て、今は聞くべくもない懐しい聲が暖く彼を迎へた所であるが、今日そこに立てば唯人生の空漠と己が身の寂寥の感に胸ふたがるばかりである。彼はまた再びケンブリヂとサマスピイの貴い思ひ出の小道や街樹の間を歩いてみた。すると、学校の禮拜所から、川の堤や丘や野から、農場や垣根から、掘り下げた石切り場から、また「風吹く丘に登る羊の道」から、至る所樂しかりし日の静かな思ひ出が彼の心に浮んで來た。かくて是等の物も亦彼はその詩の中に歌つた。更に時としては、彼は古來の種々の哲學説が死と靈魂の運命に就いて説いてゐる所を考へ、またラザロの物語に含まれてゐる神聖な意義を考へた。更にまた「齒も爪も赤く血汐にまみれた自然」が吾人に説き示す怖ろしい矛盾と人間の歴史に現はれた興亡の跡とは、彼の心の安靜をかき亂し彼を深淵の中に投じた。そして是等のものもすべて彼の詩の題目となつた。また時としては、その悲みの部屋を去つて人々の間に立ち出で、「より

すぐれたる樂人」となつて「善に満ちたる終末の世」の先觸れをなさんとする生來の衝動が彼の心に目醒めて、全身の血が高貴な目的を以て力強く躍ることもあつた。そしてこのことも彼はまたその多くの抒情詩の中に歌つた。かくて春秋去來すること十七年、その間に屢々その詩の場景を轉じ、思想想像を變じ、その望は次第に増し計畫も擴大して行つた。轉々として變はる様々な氣分よりして、新な困惑も起つたがまた新な憧憬、新な希望も起つた。人生を以て恐るべき神秘となしたかの暗澹たる諸問題は、次第に神々しき光を以て射抜かれ、その他の問題も亦次第に新しい希望の光輝を浴びる様になつた。新しき思想、新しき恐怖、そして新しき信仰、——是等の物がすべて順次に彼の詩の動因となつたのである。即ち、一方には、苦痛をやはらげ激情を吐露し、希望を宣ぶる詩がある。また一方には、喜悅を祝ほぎ信仰を明らかにし勝利を歌ひ次第に成長し行く企畫を述べた詩がある。

(註) テニスン回想録第一卷三〇四頁、イン・メモリアムに關するテニスン自らの解説——

『茲に注意すべきは、この作は一の詩であつて、傳記ではないと云ふことである。この作の基礎をなせるものは、私とアーサー・ハラムとの友情、私の妹と彼との約婚、その結婚の日の直前、ザイエンナに於る彼の急死、及びクリーブドン教會に於る彼の埋葬である。そしてその結末は私の一番末の妹セシリアの婚姻を以て結ばれてゐる。この詩は、幸福を以て終る所の、一種の「神聖喜劇」<sup>ザイエンナ喜劇</sup>として作られたものである。この詩の各節は、異つた様々な場所で書かれ、また私達の交情の種々な形相が私の記憶に浮んで詩想を促すまゝに書き加へられたものである。私は、自分でも氣づかぬうちにこんな短い詩を澤山書いて終つたが、それでは、別にこれらの詩を一つの纏つた大きな詩に編み上げて見ようとも、また之を世に發表して見ようとも思つたのではなかつたのである。この詩には、悲哀と云ふものゝ様々な異つた氣持が、戯曲に於る如く劇的に表現せられてゐる。そしてまた、恐怖も疑惑も苦惱も、唯、愛の神に對する信仰によつてのみその解決と救済を得ることが出来るると云ふ私の信念が表白せられてゐる。この詩の中「私」

と云ふ言葉は常に必ずしも作者が自己をさして云つてゐるのではない。それは寧ろ作者を通じて語つてゐる人類の聲である。』

かくの如くにして、様々に移りかはる時と境遇のうちに、「イン・メモリアム」中の諸々の詩は書かれた。そして是等の多數の詩が作られた後、彼等は初めて一定の劇的題目に従つて一個の詩に編みあげられたのである。彼等は茲に一の勝れたる輓歌を形成すると同時に、その効果の上に於て、精神上の苦闘と勝利を記せる一の抒情的戯曲となつた。それは恰もかのヨブ記の如く、困惑し苦惱せる魂が、悲哀と懷疑を通じて、單なる慣習的信條に對する形式的な服従によつて得らるゝよりも、より高い神の認識とより廣い神の業に對する知識を勝ち得たその精神的過程の麗はしい表現である。かくてこの詩は、テニスン自身が「疑惑は悪魔の子である」と詰られた時、

正直なる疑惑の中にこそ却つて大なる信仰は住む、  
まことに、世の信條の半數の中よりも。

There lives more faith in honest doubt,

Believe me, than in half the creeds.

と答へた、その言葉の眞理なることを證してゐる。

さて第一に、この詩の解剖を試みんとすれば、まづその精神上の發展に四個の著しい階段があることを知らねばならぬ。それは云はゞ死と疑惑に對する「愛」の争闘、及びすべての絶望の要素に對するその「愛」の終局の勝利から成つてゐる此の戯曲の四幕である。この詩の始めにある抒情詩は、實は最後に書かれたものであるが、全體の詩に對する序詩の位置にあつて、詩人の永い苦闘とその信仰に到達した結果とを約説してゐる。この序詩に次いで、第二に、死と云ふ事實に面した「愛」の全く困惑し切つた状態が記されてゐる（一節—二十七節）。第二に、死の神秘を前にした「愛」の疑問（二十八節—七十七節）、第三には、神聖な回想のうちに「愛」が次第に満足を感じてその信仰の成長し來る狀を述べ（七十八節—百三節）、第四に、精神的災厄に對する「愛」の勝利を歌つてゐる（百四節—百三十一節）。さうしてこの詩は更に一の跋詩を以て結ばれてゐるのであるが、それは婚姻の讃歌であつて、

死と出會ふも痲痺することなく、

尙ほ強き翼を搏つて翔り行く

that rose on stronger wings,

Unpalsied when he met with Death,

かの最高の現世的の愛をたゞへ、その愛が人間の歴史の様々な矛盾を打ち超えて、終に人生の種々な出來事がみな人間を向上せしめ文明を完成する一の高き目的點に向つてゐるのを知る様になることを歌つてゐる。

吾と共にこの地球を歩みしかの人は、

この理想の人類のすぐれたる典型が

未だ時熟さざるに世に現はれし者である。

その我が友は今神のうちに生きてゐる。

Whereof the man, that with me trod

This planet, was a noble type

Appearing ere the times were ripe,

That friend of mine who lives in God.

更に注意すべきは、以上の四つの部分が、三つの年々のクリスマス季節を祝つた抒情詩を以て明らかに区分せられてゐて——それはこの詩の全體が二年半だけの期間を占める様に短縮せられてゐるからである——同時に、その各の区分のうちで、月々の経過がまた多くの抒情詩を以て記録せられてゐると云ふことである。即ちそれらの抒情詩は、この詩人の激情が時の経過と漸次に強まり行く自己の信仰とによつて如何に變動を受け、同時に歲月の運行と共に移りかはる自然の諸相が如何に彼の感情によつて彩どられてゐるか云ふことを表はしてゐる。

48

### 一、「愛」の困惑

上に述べた様に、すべて精神的運動の出発點は極度の困惑である。開かれた墳墓の口の前に「愛」は狼狽し切つて、「悲み」の手をつかみながら「二人とも溺れてしまひは

しないか」と恐れてゐる。悲哀は此の詩人の心の上に容易に破られない虐政を布く。彼は教會の墓場を歩み年經たる水松いちょうの木の下に立つ。その木の根と鬚根は死者の骨にまつはり、その木蔭には

教會の時計が

人々の小さな生命の時を刻んでゐる

the clock

Beats out the little lives of men,

97  
49  
49

彼はこゝに人間の生命の短く空しき姿を思ひて胸塞がれ、終に己も寧ろ同じ陰慘な死の運命に與からんことを望む様になる。彼の悩みは夜も晝も彼を離れない。——その悩みは平凡な慰藉の言葉を以て和らげることが出来ぬ。それは彼れが睡れる間も、即ち「意志が暗黒の奴隷となつてゐる」時も、彼を苦しめる。安らひなき悲みに堪へずして、朝まだき彼は、過ぎし日に友の暖き手を握つた家を求めて行くが、その家の戸口に立つと寂寞の感がすぐ彼の心を包んで終ふ。然しその時

遠く彼方には

生の響きまた起り、

怪しくも、降り頻る雨のうちに、

人げなき街路の上に、青白く夜は明けかゝる。

far away

The noise of life begins again,

And ghastly thro' the drizzling rain

On the bald street breaks the blank day.

然し今や、「麗しき船」は、その「暗き貨物、失せたる生命」(アーサー・ハラムの遺骨)を、英國にと持ち歸つて来る。テニソンの思ひは、平安な海を渡り来るその船のほとりになつかしくさまようた。彼は空想のうちにその船の燈火を見、舵輪を握る水夫の姿を見た。また波の舷を洗ふ音を聞き、夜の空気を動かす鐘の響きを聞いた。彼は風に静かならんことを、波に穏かならんことを命じた。かゝる思考や空想によつて、

また友が英國の教會に葬らるゝことの祝福を思ふことによつて、流石に一種の沈静な氣持が彼の心にもひそかに起つて来た。——然し、それは絶望の沈静であつた。唯熟して落つる栗の實の音のみによつて破られる秋の朝の沈静の中にあつて、彼は打ち開いた景色の深い平和と静寂に思ひふけたが、野と空を領するすべての沈静のうちに彼は唯自己の絶望の象徴を、死のより深き静寂の暗示を、即ち

たゞ波打つ海につれて高まるのみなる

かの氣だかき胸に宿れる死者の静寂

(譯者註—氣高き胸とは今船によつて運ばれつゝある亡友ハラムの胸をさす)

dead calm in that noble breast

Which heaves but with the heaving deep.

の暗示をのみ見る様に思はれた。嵐の夜が来ると彼の氣分もかはる。風が起る、木から最後の紅葉を吹き去つて終ふ、すると彼の心は、颯風の威力に掻き廻され、裸になつた枝の打ち狂ふ狀に昇奮し、そして「禍に對するその狂はしい不安」の中に、彼は



燭のへりをつけ輝ける堡壘の如く

暗澹たる西の空に傾き立つ

*topples round the dreary west,*

*A looming bastion fringed with fire.*

雲の姿を貪る様に見つめるのであつた。

それでも終にその船は安全に港に着いた。彼はその嬉しき奉仕に對してその船を祝福した。彼の激情の嵐はこゝに再び鎮靜した。即ち彼は今、その死者に對する葬ひの典儀によつて心を慰さめられ、英國の土に彼を優しく埋葬したことによつて義務を盡し得た感に安ずることが出来、その友の聖なる骨の塵から故國の董が美しく野邊に咲き出でんことを祈つたのである。彼はセヴァン河の畔なる靜かな墓地の有様を冥想した。そこには日に二度

海の鹽水通ひ來りて、

さゝやき鳴るワイ河の水を中程までも黙さしめ、


丘のはざまに沈黙をみたす

*The salt sea-water passes by,*

*And hushes half the babbling Wye,*

*And makes a silence in the hills.*

この河の姿は、彼の空想にとつては、恰も退いては滿つる彼の悲哀そのものに似てゐた。——それは一杯に滿ちた時は却つて黙してゐる。そしてやがてその深い悲痛の氣持が退きはじめると再び聲を立てはじめ。そして彼は少しなりともその想ひを歌ふことが出来る様になるのである。

然し再びその詩の主題は變はり、詩人の氣持も移つて行つた。彼は望みと歌に滿ちた友情の打ち破られた跡を顧み、すべての春の希望の空しく失せた姿を歎く様になつた。再び彼はその記憶のうち、歳より歳に移り行く徑のあとを辿り、終にその徑が低く谷間に入つて、そこに「人の恐るゝ亡靈」が暗黒の中に彼の友を包み込み二人の美しい友誼を斷つてゐる姿を認める。彼のこの「イン・メモリアム」の最初の一群の

抒情詩の題目は、かゝる困惑と苦痛、かゝる狂暴な悲歎と平靜な絶望を次々に取扱つたのであるが、この様な回想の情はこの詩人が彼の喜びの日を顧み、その日をおくも純潔に完きものとなした「愛」の姿を深く思ふ様になると共に移りかはつて、そのうちから「愛はよきものである、よしそれが悲みに伴はれようとも」と云ふ一の確信が彼の心に起るに至つた——彼はこの眞理を彼が最も悲んだ時に感じた。

愛して失ふはまされり、

嘗て一たびだに愛せし事なきよりも。

*'Tis better to have loved and lost,*

*Than never to have loved at all.*

そして此の確信と共に、彼のこれまでの恐怖の感じを脱して、彼の心に或る決心が現はれて來た。即ちそれは總ての輕躁な舌の云ふ所を顧みず、勝利者「時間」の誇りを蔑視して、

月の経過は「愛」を征する能はず

*No lapse of moons can conquer Love.*

と云ふことを證明しようとする決心である。

## 二、「愛」の疑問

かくの如くにして悲哀の最初の苦惱は和らげられ、茲にこの詩人の心は、死の暗い神秘に、宇宙の中の悲みと禍ひに、向けられて來た。上に述べた如くこの「イン・メモリアム」の初めの部分を色づけてゐる荒寥たる困惑の情とそれに續く熱情の嵐が去つて、次に漠然とした迷ひの感じと熱心な疑ひの念とが起つて來たのである。かの悲しい事件の後の最初のクリスマスの宵祭は、月影も無く霧に包まれて近づいて來る。死者を悼んだ人達も、「慣例」と「習慣」と呼ぶ、かの「過ぎし日の年老いたる姉妹」の爲めに、つとめてこの祝祭の季節を守らうとする。然しうはべのみの賑かな談笑やけばくしい裝飾の間にあつて、彼等の心には

すべての人を見まもり居る一つの黙せる影に對する嚴そかなる意識

Of one mute Shadow watching all,

が寸時も絶えない。でも、その神聖な祝祭の歌が歌はれると共に、次第にその季節に祝ぐ信仰の内に含まれてゐる聖い意義が、彼の魂の上にひそかに廣がつて来る。そして終にかの「希望の生れた時に輝く光」がともされる。かくてこの詩人の想像力は、熱き同感の情を以て、ベタニアに於ける救世主と、ラザロの墓になされた奇蹟の物語に思ひ耽る。この奇蹟に於て、人々は幾世紀に亘る永き暗黒を経て、初めて黎明の闕に立つた様に思はれる。即ち彼等質朴なる村人達は、岩に刻まれた墓を覗いて、そが神聖な望みにより恵みに満てる人格の光によつて輝やかに照らされてゐるのを見る。——

見よ、クリストによりて甦らされし人を！

Behold a man raised up by Christ!

その兄弟が死の手から彼等に返された時、かの姉妹の家に如何なる喜びが満ち溢れたことであらう！——その喜びはその復活の神秘に對する彼等の意識をも全く包んで終

つた。「すべての複雑した思想もすべての好奇的な恐怖も」悉く墳墓から死者の返された喜びの情の爲めに何處かへ持ち去られて終つた。

崇嚴な喜悅は橄欖山の

紫の頂きにまで現はれた。

A solemn gladness even crown'd

The purple brows of Olivet.

マリアは單純に信じ愛し崇拜した。彼女の眼が生きてゐる兄弟の顔から轉じて、「まことに生命そのもの」なる、かの貴い主の上に落ちた時、彼女の地上の愛は、より高い者に注がれることゝなつた。

然し、詩人の想像が斯く神聖な物語の人間の方面に、即ちその姉妹達の愛と喜びに思ひ耽つてゐる間に、彼の心はその話の神的な意義を知らんことに憧れた。若しラザロが死とはどんなものであるかと云ふことを告げてさへ呉れたなら！「その四日の間」彼が何處に居たか、また彼はその時自分を悼み泣いてゐる姉妹の聲を聞いてその姉妹

の爲めに自分も悲み歎いたかどうか、それをラザロがあかして呉れさへしたなら！あ  
あ然しラザロはそれを話してゐない。そして神秘は後にまでも依然としてその儘にの  
こることゝなつた。そして今ではその奇蹟は疑はれ、その奇蹟を施した主までも疑は  
れてゐる。古代の單純な信賴の氣持は去つて終つたのである。然し或る人達が、その  
信仰を一の形式に固定することを拒むことによつて、一層純粹な空氣と高級な信條に  
到達し得たと自分で思つてゐる間に、テニスン<sup>①</sup>は彼等に、單純な人達の信仰を攪亂す  
ることのない様に警告し、それらの人達が「神の眞理」と離れないものとしてゐるか  
の「肉と血」の神聖なることを宣言した。けれども、テニスン自身も亦彼の生息した  
時代に通有せられた悲しい疑惑の淵に陥ることを免れ得なかつた。その恐ろしい疑ひ  
は、墓の彼方にも生命が存するか、それとも「如何なる生命も永久に生くる能はず」  
と云ふ嚴酷な信條が眞であるか、と云ふことに就て起るのである。そして、何れかに  
決定すべき此の二つの恐ろしい問題の間に荒れ廻つてゐる渦巻の眞中に立つた時、彼  
の意識の上に次第に、靈魂の微妙な直覺を通じて、確固とした或る信念が現はれて來

た。この確信の眞實性を彼の心は否定することが出來なかつた。そしてそれは彼の信  
仰の基礎となつた——即ちそれは

生命は永久に生きる、

然らざれば地球はその髓まで暗黒となり

すべての存在は塵と灰に化する。

*That life shall live for evermore,*

*Else earth is darkness at the core,*

*And dust and ashes all that is.*

と云ふ確信であつた。この確信と共にまた、之に劣らぬ重大な意義をもつた他の信念  
が、その悲みの心に起つて來た。即ちそれは愛も亦不死であると云ふことである。そ  
の故は

若し死が初めよりたゞ

死として見られしならば、愛は存せざりしならん。

If Death were seen

At first as Death, Love had not been,

又は存してゐても、その愛は「單なる怠惰の氣分のまじはり」か、野獸の烈しい輕躁な情熱に過ぎないものとなるからである。

今やかゝる微妙な直覺がその權威を彼の内なる性質に實證したゝめに、テニヌンの思想は再び「發見せられた真理の中に握られてゐる慰藉」の方へ轉ずることゝなつた。その真理は、それが靈的直覺を通じてその心に確に示されるまでは、彼はそれを信仰の原理として極く漠然と認めてゐたに過ぎなかつた。然し今や終に生命と愛の不滅と云ふことを確信するに至つて、彼は基督のうちには是等の貴い真理の啓示を認める様になつた。人々がこの基督と云ふ靈魂の中の無限な言語を絶した真理を、どんな形式の信條で具現するかと云ふことは暫く措き、テニヌンは今少くともこれだけのことは確に把握してゐた。即ちこの地上に於けるイエスの單純な生涯の中には、人間に與へられた總ての他の啓示を超越した或る「無限なる物」の啓示がある。そしてその啓

示は總ての人間が讀み且つ了解し得る所である。茲に、人間が自己の本性のうちに深く潜んでゐることを認める總ての神秘的な真理を具現して、之を一般に廣く認めらるゝ様になした一個の象徴があるわけである。「それ故に」とテニヌンは云ふ――

「道」は肉體となりぬ。而して人間の手を以て、

信條中の信條、あらゆる詩歌の思想よりも

力強き信條を、美しく、

完全なる行爲のうちに實現しぬ。

かくて稻束をつかぬる者も、  
家を建つる者も、墓を掘る者も、  
また珊瑚礁をめぐり吼ゆる  
荒浪をうちまもるかの蠻人の眼も、  
その信條を讀み得るに至りぬ。

the Word had breath, and wrought  
With human hands the creed of creeds  
In loveliness of perfect deeds,  
More strong than all poetic thought ;

Which he may read that binds the sheaf,  
Or builds the house, or digs the grave,  
And those wild eyes that watch the wave  
In roarings round the coral reef.

彼は常に「基督の靈的性格こそ最大の奇蹟より更に不可思議なものである」と云つてゐた。

然しながら、是までになつてもこの詩人の悲歎はまだ全く消滅したわけではなかつた。春が來て水松の樹の梢に緑の輝きを點じて、慰藉の思ひは悲哀の唇から落ちる

囁きの聲に消されて終ふ。然しその季節が過ぎ去ると、彼はやうやく死者の状態と、死者に對する生者の關係とに就て思索をなし始めた。一つ／＼哲學者等の盲目的な憶説が彼の心に浮ぶまゝに、彼はその各々から出来るだけの慰安を汲み取つた。然し最後に、個人は死によつて「己と云ふ限界を悉く融かし去り」、一般的な靈魂の中に没入して、實在の底ひのない大海の中に永久に形を隠して終ふと云ふ漠然とした推論が彼の前に提出せられた時、彼の心は起つて、かくの如きあまりに索寞とした信仰によつて、「愛」の欣求する安息と不満の消滅とを得ることは到底出来ないと言した。それ故に彼はこの論を全然拒否して終つた。愛の満足は嘗に先に逝いた人々と再び結合することによつて得られるのでなく、その結合は再認と回想の念を伴つたものでなくてはならぬ。生の効用の一つは、「吾」は「吾」であつて「吾の觸れる物とは別の物である」と云ふことを學ぶにあつて、一度このことを學べばそれは容易に忘れることが出来ないとい彼は云つてゐる。かくて大いなる權威を以て、個性の永續と云ふことに對する靈的直覺が現はれた。そして斯く展開し來つた愛の強い保證のうちに、詩人は己の

信仰を宣言して云ふ——

永久の形態は尙ほ

永久の靈魂をその周圍の總てより分つ、

而して互に出會ふ時、我尙彼を認め得るならん。

Eternal form shall still divide

The eternal soul from all beside ;

And I shall know him when we meet.

テニスンがかゝる過程を経て到達し得たその確信——個人の生命及び意識の永久的存續と、「愛」の不滅とに對する彼の信念は眞に崇高なるものであつた。然し、かくても尙ほ、彼を惑はし苦しめる一つの問題が残つてゐた。それは「宇宙に於ける惡の存在」と云ふ問題である。テニスンは彼が祈求してゐるかの亡友との靈的な交りを結び

得ん爲めには、彼自身その資格をもつてゐないことを感じて、初めてこの問題に思ひあたつたのである。「愛」は彼に告げて、

人生が罪惡の斑點に汚されゐること

That life is dash'd with Hecks of sin.

また彼が自分の理想とする高い人格の目標に少しも外れない様に自身を従はせて行くことが出来ないことと云ふことをあまり思ひ悩まぬ様にと諭す。然し個人の生涯に於て罪惡が如何なる職分をなしてゐるかと云ふ事實を考へ、健全な壯年時代も、時として徒らに騒音と痴愚に満ちた青年時代を経過して初めて生ずることがあると云ふ事實を反省した時、彼は再び自己の無智を感じざるを得なかつた。唯その心のうちなる聲は尙ほ彼に

ともかくも善が、

自然の苦痛にも、意志の罪過にも、

疑惑の缺陷にも、血の汚點にも、

悪の終局の到達點なるべきこと。

that somehow good

Will be the final goal of ill,

To pangs of nature, sins of will,

Defects of doubt, and taints of blood.

即ち、人々の生涯のうちには、その結び合ひ纏れ合つた糸筋の意匠はわからないでも、そこに或る神の企畫が存してゐることを信ぜんことを促したのであつた。

然し「善にして無効に失はるゝものは一つもない」と云ふ信念と、實際の自然界の惡に満ちた示唆との間の矛盾に對して、テニスンが反駁の論據としたものは一の漠然とした脆弱な直覺に過ぎなかつた。「然らば神と自然は相争つてゐるのか」と彼は皮肉に質問した。そして之に對する答としては、唯暗黒な饑餓に包まれた不安の言葉が齎らされたのみであつた——

見よ、吾等は何事も知らず——

唯吾は信<sup>じ</sup>待<sup>つ</sup>るの<sup>人</sup>、善<sup>が</sup>  
終には——遙かなる彼方<sup>まで</sup>、總ての物に落ち來ることを、  
而して年々の冬は皆春に變り行くことを。

わが夢は斯くさまよふ、されど吾とは如何なるものぞ？

そは夜の闇に泣き叫ぶ嬰兒、

光を求めて泣き叫ぶ嬰兒、

而して泣くよりほか言葉なき嬰兒である、

Behold, we know not anything ;

I can but trust that good shall fall

At last—far off—at last, to all,

And every winter change to spring.



So runs my dream : but what am I ?

An infant crying in the night ;

An infant crying for the light ;

And with no language but a cry.

物理的法則の無情な過程を思ふと、彼は再び暗黒な絶望の闇に陥つて行つた。そして「今まで固く踏み來つた地によるめく様になつた」

而して、暗を通じて神のもとへ登り行く

大いなる世界の聖壇きよばしの階段の上に

その煩悶の重荷に堪へず打ち轉びつゝ、

And falling with my weight of cares

Upon the great world's altar-stairs

That slope thro' darkness up to God.

彼は「信仰の不具なる手」をさしのべて、徒らに暗の中をまさぐり、「萬物の主と彼の

感ずるもの」に向ひ聲をあげて「より大いなる希望の成らん日をかすかに信ずる」。然し再び「自然」の聲は冷酷な語調を以て、感覺的事物の世界に起る苦痛災厄に對して自然が無關心なる事實を表明し、自然に於ける浪費の状態、その過程の無目的と見ゆる現象、自然が個人の生命のみならず、すべての生物の全種屬を濫費して憚らない状態を説く、

吾は或は生を與へ、或は死を與ふ、

魂とは呼吸に過ぎず、

わが知る所は是のみ、

I bring to life, I bring to death :

The spirit does but mean the breath :

I know no more,

と自然は陰慘な言葉を吐くのである。かくてこの詩人の薄弱な信念は打ち碎かれ、再び極度の疑懼と落膽の中に投げこまれる。彼は人間の脆さ、その命の空しさ、その望

み——即ち人類の最も高く神聖な憧憬の念のすべて仇に消え行く様を思ひ、心の力を奪はれて終ふ。「如何なる應答をか、如何なる報償をか望み得べき？」と彼は問ふ。然しその返事は與へられない——それは匿されてゐる、

とばりの後ろに、とばりの後ろに。

*Behind the veil, behind the veil.*

然し、この暗の無希望な不安の氣持は去つて、他の考へが起つて來た。そして彼の心には、人間の衰死と墳墓のもつ暗示に拘はらず、愛は死を通じて尙生きることが出来るると云ふ確信が再び眼醒めて來る様になつた。彼は死者が生者に對して慥に有してゐる靈的の關係に就て思索した。そしてまた彼自身が記憶と靈的交通とを以て、かの亡友に對して保つてゐるその關係を思索した——そして是等の思索の結果は悉く天使の姿を認むるに至り、彼の悲みの冠は天使の手に觸れて青葉を出し、希望と信仰がそこに花瓣を開いて來た。亡き友の晴れやかな顔は、彼の懷疑と煩悶のうちに微笑を送り、すべての彼の恐怖を和げた。かくて終に、「愛」の神聖な力によつて、死と神恵

に關する暗黒な疑問は、轉じて神の力と愛に對する信頼となつて現れた。彼の悲みの記念の日は、

ポプラの葉を白く翻らせ

窓硝子を烈しく打ち揺がす風と共に

*With blasts that blow the poplar white,*

*And lash with storm the streaming pane.*

9  
明ける。然し、彼がその友の不時の死を思ひ、その爲めに成就しない儘に破壊せられた友の豊かな發展の姿を想像し、幾萬の世界幾千の歳月を通じて人間の名譽なるものが何處に於ても唯空しい影に過ぎぬことを思つてゐる間に、彼の精神には、「自然」は盲目的な鬭争的な種々の勢力の亂れ合つた混沌たる世界でなく、法則を以て支配せらるゝ一個の秩序ある宇宙であると云ふ觀念が生じて來る。そして彼は、その法則の源である神の不可思議な大智によつて、自己の恐怖と無智を救つて貰はうと云ふ氣になる。かくて終に彼は、神は善であつてその創造のうちに高く恵みある企畫を成就して

ゐると云ふ直覺によつて、惡の問題の終局の解決を得、その思を歌つて次の如く叫んでゐる。

吾は自然を呪はず、また死をも呪はず、

何事と雖も法則にもとるものなきが故に。

*I curse not nature, no, nor death;*

*For nothing is that errs from law.*

人間の歩み行く道が雑草に閉がれて終ひ、彼の生涯の全部が遂げられなかつた所で、それは何でもないではないか？人間の事業人間の報酬は、「彼の主」に委ねられてゐる。その主にとつては千年も一日の如く、その主は最初よりその終局を見ぬいてゐる。

無窮の歲月のうちに

人間の事業に如何なる名譽か遺るべき？

*What fame is left for human deeds*

*In endless age?*

と彼は問ふ、そして答へる、

そは神に委ねらる。

*It rests with God.*

かくの如くにして、彼の悲歎の颶風が去り心の不安の恐濤が鎮められた後、テニスは終に初めて安心の港に到達したのである。

### 三、次第に現はるる満足

單なる信仰の確立と云ふよりも、更に一層高い階段の精神上の展開がテニスを待つてゐた。それは人間相互の同情乃至伴侶の念を通じて、人生を論理的に擴大し、真正な信仰の必然な歸趨として人類に奉仕せんとする活動のうちに見出されるのである。「イン・メモリアム」の第三段及第四段に現はされてゐるのは、即ちこの一層高い階段であつて、そのうち第三段に於ては、約束豫言として表はされ、第四段に於ては、光輝ある實行と勝利として表はされてゐる。

この意味に於て、戸外には霜と音もなき雪を伴ひ、戸内には賑かな爐の火とそして「何物か失くなつた物に對する靜かな感じ」を伴つて訪れ來つた第二のクリスマスは、この詩人の精神上の歴史の新しい出發の初めを祝ふものとなつたのである。即ち終に、死は靈の永久の進歩に於ける前進の一步に過ぎないと云ふ確かな信念を得て、彼は今や望みに満ちた喜びを抱いて新しい年に向つて行つた。彼のすべての疑惑はこの信念のうちに完き解決を得、墳墓とすべての「他の抱擁のうちに育はぐまれてゐる地下の生命」に對する恐怖の念さへも、もはや此の信念を動かすことは出來なかつた。嘗ては次の春の來るまで生きんことすら望まなかつたものが、今は悲しみの冬を後ろに捨て、鳥や花と共に

凍つた苔を開き

新しき咽を歌もて溢れさす

burst a frozen bud,

And flood a fresher throat with song.

ことを望む様になつた。平和は靜かな風の如く彼の魂の上に忍んで來た。それは春の初めの度々の雨と新に生れ來る命とに香しく満ちわたり、夕べ雲輝く西の空より吹き來つて、彼の血の熱を吹き拂ひ、「死」と「疑ひ」の亡靈共を追ひ拂つて終つた。も一度彼はケムブリッヂの神聖な土地にさまよひ、「以前と同じ物を、而もそれでゐて全く同じではない物を感じた」。彼は再びかのアーサーの室の戸口に立つて、嘗てその室で彼の聲がその年若い友達等の聲とうちまじつて或は語り或は歌ひした昔を偲んだ。そして記憶のやさしい恵みによつて、彼は再び「黄金色の曉」を得た様に思つた。追憶のうちに、今一度彼は、嘗て樂しかつた過去に友とさまよつたサマスピイの丘の靜かな道を歩き廻つた。そこに以前の如く、彼は「朝の霧のうちに鳴らす鎌の音」や「花きびすに裸まで埋れて動き廻る足の音」を聞いた。また

すひかづら蔽ひ茂れる壁蔭に、

桶の中に泡立つ乳の音を、

また蜜を持ち歸る蜂の唸り聲を、

behind the woodbine veil,  
The milk that bubbled in the pail,  
And buzzings of the honeyed hours.

聞いた。

かう云ふ過去の回想や神聖な會遊の地に結びついた懐しい思ひのために、テニスン  
の心は和らげられた。そして彼は、靈的交通によつて死の爲めに破られた友誼を恢復  
しようとした。かくて夏の静かな一夜、芝生の上に蠟燭の焰は揺めきもせず燃え立ち、  
物音一つの破るものもない沈黙の中にあつて、友が生前に書いた手紙の數々を繰り返  
して讀んでゐた時、テニスンは靈的實在を認識するの祝福を得た。即ちその時突然、  
彼は死んだ友が過去の闇の中から彼に觸れた様に感じた。ある生命を持つた靈魂（恐  
らくは神の靈）が彼の靈魂に觸れて閃光を發した。そして彼は偉大な宇宙的な力の群  
の中に引上げられて

いと高さ思想の境をさまよひ、

實在の姿に觸れて、

世界の深き脈搏を捉へた、

永遠の樂の音は

時の歩みを——機會の衝擊を——

死の打撃を奏でゝゐる

whirl'd

About empyreal heights of thought,

And came on that which is, and caught

The deep pulsations of the world,

Aeonian music measuring out

The steps of time—the shocks of chance——

第二章 「イメン・メモリアム」——精神的苦悶の記録

然し終に、曙の青白い輝きが次第に「果なき晝の光にひろがる」と共に、彼のこの恍惚の思ひも「疑のために打たれて」その影を消して終ふ。彼はこの神秘的な経験の意義を「物質的形狀を持つた言語」を以て表現することは出来ぬことを感じたが、而もこの精霊と精霊の交通によつて彼の意識に確められた絶対的實在なるものは、「イン・メモリアム」の宗教的哲理の根柢となり中心となつたもので、その悲歎と懷疑の初期に於て彼が容易に悟り抜くことを得なかつた靈的直覺の眞實性を、こゝに最も力強く保證したのであつた。まことに、かくの如き神秘的意識の状態のうちこそ、見えざる物の實在を説き、物質的綜合を非として精神的綜合を唱道するテニスンの哲學の根柢と中心は見出されるのである。

四季が移つてアーサーの死の日が再び返つ來ても、彼の心の平靜は亂されなかつた。もとよりその爲めに悲しい記憶の數々が蘇り、自分と同じく亡き人の命日を祭る人々に對する同情の思ひを新しくそゝられたことは勿論であるが——最初の命日は、

風が吹いたり雨が降つたり全く彼の心のうちの苦惱とかはならない荒れすさんだ天氣であつたが、今度の命日は穏やかに喜ばしい日和で、鳥の囀りや家畜の鳴聲や、來ん秋の用意をも忘れた様な長閑な歌の聲が耳に満ちて來た。少年時代の住家のあたり、彼が嘗て遊び愛でた丘を攀ぢて見ると、到る所野山の景色が「彼の友の嬉しい思ひ出を呼吸してゐた」。

然し終に今や、このサマスピイの懐しい住み馴れた土地を——庭園も小河も風にそよぐ森も悉く、永久に離れねばならぬ時が來た。是から數年の間、自分の記憶がこの田舎から次第に薄らいで行つて、そして新しく移つて來た外の子供達が少しづつ、此所に馴染んで來るまでは、この庭も小河も森も暫くは誰れ顧みる者もなくなるのかと思ふと、テニスンは胸を痛めないでゐられなかつた（テニスンは一八三七年サマスピイの牧師館を去つたのである）。

然し、彼が「その育てられた家の戸口から」出て行く丁度前の夜、彼は勝れたる詩人となるべき豫言と光榮ある希望の約束を示す吉夢を見た。即ち彼は夢に、詩的才能

を現した物と見られる少女達と、青春の丘の間に建てられた家の中に住んでゐた。その丘には隠れた山の頂きから落ちて来る水に養はれて、一つの川が流れてゐる。少女達は豎琴をかなで、「賢く良く美しき」物を歌ひ、一つの帷に包まれた像のめぐりに坐つてゐる。その像の形は彼が愛したその友の形である。然しそこへ海の方から彼を呼ぶ聲が聞えて来る。すると彼は尙ほ夢の中に、その住家を立ち出で、かの河のほとりに下りたち、船に乗つて「多くの平らな牧場や蔭深い絶壁に沿うて」下つて行く。岸の開きが次第に廣くなり、流れがその勢を増して来るに従つて、かの少女達はその力を加へ容姿の端正を増して来る様に見える。そして彼自身の手足にも同じく、彼は「アナキムの筋力、タイタンの心臓の鼓動を感じる」。そして彼等が愈々海の近くに達した時、彼は少女達の歌が更に氣高くなつて来るのを見る。即ち

80

その一人は戦の消滅を歌はんとする如く、  
また一人は未來の偉大な人類の  
歴史を歌はんとする如く、

更に一人は星の形成を歌はんとする如し。

As one would sing the death of war,

And one would chant the history

Of that great race, which is to be,

And one the shaping of a star.

かくて終に彼等は深い海に達する。そこには「前へと這ひ寄る潮が泡だち始めてゐる」、彼は「大きな船がその輝く舷を高く現はし」、その船の甲板の上に彼の亡友が「大人より三倍も大きく」成長して立つてゐるのを認める。彼はその船に攀ぢのぼる。そして彼の友とあの少女達と悉く一つになつて、更に航海を續けて行く——

深き海のはてに陸地の如く臥しゐる

紅の雲の方へと。

toward a crimson cloud

That landlike slept along the deep.

この夢は、この詩人の過去とその利己的な悲歎の歌との幻影である。同時にそれは彼の未來に對する神秘的な豫言である。即ち彼は是より後、彼にとつては未來の完全な人間の豫示であるかの亡友と再び一つになつて、此の地上の生を終るまでは、科學の有望な將來に就て、また未來のより偉大な人類に就て、歌ふべきさだめを有する——この夢はこのことを豫言してゐるのである。

#### 四、「愛」の勝利

「イン・メモリアム」の第三の部分の終結をなしてゐる神秘的な幻想の中には、上に述べた如く、この詩の第四の即ち最後の部分の主要な劇的主題が暗示せられて居り、「愛」が最後の勝利を得て信仰を確立し人間相互の同情と奉仕の中に喜びを見出すに至る事が豫言せられてゐる。三年目のクリスマスは即ちこの精神的歴史の新しい時代の黎明を劃するものである。このクリスマスの季節は、以前の如く舞踏や歡樂やを以て祝はれないで、その祭の神聖な氣分の半ばを奪ふまでに思はれる、住みなれぬ國

イ  
イ  
イ

の山河の間に於て、沈黙と貴い思ひ出を以て祝はれる。過去は過ぎて終つた。そして我が詩人は、自然の小やみなき推移、四季の徐ろな變轉が、その踏むべき行路を行き盡して、今や「善に富める終末の世に到らん」とするのを感じる。そして彼はこの感じを以て、新年を迎へる歡喜の聲をあげるのである。即ち彼は除夜の夜半の鐘が、彼の個人の惱みを、その哀悼の調べを、そしてすべての

この地上にて最早や見るを得ざる人々を戀ひ、  
徒らに心を弱らしむる悲しみ

the grief that saps the mind,

For those that here we see no more.

を、今夜限り送り出さんことを求めた。そしてまたその鐘に、更に進みたる文化を齎すべき、かの「より勝れた樂人」をば、その響もて呼び迎へ、同時にこの時代の虚偽やすべての害惡——社會的争闘、誹讒、憎惡、黄金の慾、地位家門の虚しい誇、更に「醜い病の古い姿」や、過去幾千の戦争をば、悉くその響を以て追拂はんことを求め、



また眞理と正義の愛、善に對する萬人の愛を迎へ、生活のより勝れたる諸形式とより、美しい禮儀とより純な法律を迎へ、

勇敢にして自由なる人を、

より大いなる心を、より優しき手を、

その響もて呼び入れ、

國土の闇をその響もて打ち拂ひ、

未來の基督を呼び入れん

Ring in the valiant man and free,

The larger heart, the kindlier hand ;

Ring out the darkness of the land,

Ring in the Christ that is to be.

ことを、彼はその鐘に求めた。如何に完全に、テニスンはこの高貴な企てを實行し、彼の時代に對して、かの「より勝れたる樂人」となつたか——當時新しく起つた人道主

義、多くの道德の源泉として人間の心にひそんでゐる神聖な愛情、人生の最も卑賤な状態をも神聖なるものたらしむる永遠の人道、人生の意識と行爲、靈の歩むべき様々の道、すべてかゝるものに就て聲ゆたかに歌ふ樂人となつたか——それは此の詩の作られた時より後相ついで書かれた總ての彼の詩が充分に示しある所である。

この企てに對する熱心の故に、またその企ての教へを實行することによつて生じた確信の故に、テニスンは亡友アーサーの誕生日を——それは氷が張つて烈しい北風の吹くいやに寒い日であつたが——快活と唱歌を以て祝つた。そして彼は、知識に富み敬畏の念深く慈善心に豊かな一個の理想の紳士としてのハラムの人格を思ひ耽つた。春の來ると共に、すべての彼の疑惑は永久に消えて終つた。彼は茲に再び天地創造の記録に就て思索した。それは嘗て彼をして人間の如何に無智であるかを感じしめ、終には善が悪から生れると云ふことに對する人間の信念の根柢の如何に脆弱であるかと云ふことを嗤はしめたものである。然し彼は今や、自然の諸事實の裏に潜んで、よく自然の表面に見られる浪費と殘虐の相とを説明してゐる一の潑刺たる進歩の法則の存在を

認めた。また精神の急激な飛躍を以て、彼は人間の歴史の種々相のもとにも、人間生活の罪と憐みの現象から生ずる恐ろしい疑惑を解き得る同様の法則の存在することを認むるに至つた。獸的な情慾に満ち、道徳的精神的な性質に薄弱なる今日の人間は、ただ時が経てば現はれ來べき「より高い人類の先驅」に過ぎない。またそれは人類と云ふ大家族の各員が、

若し彼が時のなす此の業を自己の中に  
型どり、次第に之を成就し行かんか、

If so he type this work of time  
Within himself from more to more.

終にはそれ／＼己の性格に従つて到達し得べき、そのより高い可能性の先驅に過ぎない。彼は、種族としても個人としても、暗黒と恐怖の火と涙の水とをくゞり、「運命の打撃によつて打ち鍛はれ」、  
よろめく牧神、肉慾の宴げより、

立ち上り逃れ行き、

絶えず上に進み行きて、獸の性を逐ひ出し、  
猿や虎の性を死なしむ、

arise and fly

The reeling Faun, the sensual feast;

Move upward, working out the beast,

And let the ape and tiger die.

これ人間の高い運命である。

かくの如く、偉大な宇宙的の諸勢力の争闘を通じ、人生のより高い形式がそのより低い形式に對して優越の地位を占めんとする戦ひを通じ、人類の野獸的な本能を征服せんとする道徳的性質の更に高貴なる戦闘を通じ、確固として進み行く進化の過程のうち、我が詩人は彼の精神の困惑懊惱をきつぱりと解決して終つた。他の者は物質的統合論を取らば取れ。彼自らは、ポーロが野獸と争つた如く死と争つて、然も終に

死の悲しい酷烈な意義に降服することが出来なかつた。それは彼は「他の物の爲めに生れた」者であるからである。物質的宇宙の移動してやまない姿や、人間の歴史の上に演ぜられる複雑で神秘的な演劇も、今日もはや靈の永生と靈の不滅に關する彼の信念を揺がすことは出来なかつた。彼は風雨を超えて高く響く「愛」の聲を聞いた。その聲は偉大な權威ある調子を以て、「總てみなよき」こと、即ち種々の願望と努力の打ちまざつた複雑な蜘蛛網の裏に、總ての物は力を合せて神の無限な智慧に従つて善の達成に努めてゐることを、宣言してゐるのである。

そして斯くの如く「人間世界の移り行く行路」を信頼の眼を以て讀む様になつたこの信仰は、かの死と争つて墳墓の恐怖を證明した信仰と同一のものである、とテニスン自ら述べてゐる。それは又、微少な星屑や花の中に、人間歴史の行路の中に、そのすべてに内在する神を發見し、言語の表現を絶した神秘的結合を以て神と一になつてゐる靈魂を發見した、かの信仰と同一のものである。それ故にこの詩の結末は、總て他の事物が過ぎ去つても獨り殘存し、且つ人間のより高い永續的な部分と一つに結

合してゐる、かの「生きた意志」に對する崇嚴な祈禱を以て結ばれてゐる。それは吾の爲す所が——テニスは此所で自分の爲めに語ると同時に人類全體の爲めにも語つてゐるのであるが——悉く純化せられ、而して

吾等が此の塵の世の中より、

そを聞き給ふ神に向ふ如く聲をあげ、また

愛をもて征服せし歳月を超えて、

吾等と共に働き給ふ神に叫びをあげ、

自制の中より生ずる信念を以て、

かの眞理、そは吾等が嘗て愛せしすべての者、

また吾等すべての源なる者と、靈と靈、一になる迄は、

證し得られざる眞理を、尙ほ信じ得んことを

That we may lift from out of dust,

A voice as unto him that hears, O  
A cry above the conquer'd years,  
For one that with us works, and trusts,

— R. W. M. R.

With faith that comes of self-control,

The truths that never can be proved

Until we close with all we loved,

And all we flow from, soul in soul.

求むる一つの祈禱である。

彼の信仰が展開し來つた経路に關する以上の考案よりして、テニスンは「是等の悲しみより生れた短い詩の群」の中に、深遠な哲理を究めたり、人間の運命の神秘を透徹した視力を以て見抜いたりする様なことを目的としたのではない、と云ふことは直ちに察せられるであらう。彼自らも言つてゐる如く、「もつと大きな詩を作れると信ず

る」のは彼の欲する所でなく、寧ろ彼は、

涙の淵に翼を浸し、その面を掠め飛び去る

短き飛翔を歌ふ歌を、

燕のその唇より

from the lip

Short swallow-flights of song, that dip

Their wings in tears, and skim away.

漏さんことを願つたのである。それ故に、冷やかな論理の方法を以て信仰の哲理を秩序的に解明して行くと言ふ様な所は「イン・メモリアム」には見られない——否、その作詩の條件が、よしそれを拒否しなかつたとしても、かゝる哲學的の説明は詩の本来の性質として到底容れることが出来ぬものである。テニスンはこの詩の中に、彼を悩ました疑惑や彼の情神的視力を昏ました不安の念に對する何等正式の解決を提示してゐない。彼は科學乃至哲學を通じて、かの不思議な認識に達したのではない。彼は靈

的直覺の聲を通じ、又體驗を通じて、それに達したのである。この直覺、この經驗の嚴とした事實の例にあつては、科學や哲學やは空虚な亡靈に過ぎない。此の詩はまことに、テニヌンの信仰が、徒らな勇敢や過信を以てなく、眞正の謙抑の念を以て、終によく自覺の域に達した、その眞率にして主觀的な經路、即ち彼が暗黒から光明へ、恐怖から信仰へ、懷疑から安心と信頼とに到達した經路に關する記録である。

吾等が祝福せられんと祈禱する物、

吾等のいと貴き信仰、吾等のいと恐ろしき疑惑、

彼、彼等、一なる物、總てなる物、内なる物、外なる物、

吾等が想像する暗中の力、

吾は「彼」を世界にも太陽にも

鷲の翼にも蟲の眼にも見出さざりき。

また世の人の試むる論證の手段を借りて、

薄弱なる蛛蜘蛛網を編まんともせざりき。

信仰が睡り鎮まりし時、

吾は「最早信ずる勿れ」と云ふ聲を聞き、

神もなき深海に倒れ崩れて、

とこしへに碎くる磯波の音を聞きしが、

而も胸の内なる温みは

凍らんとする理性の寒き部分を溶し、

怒れる人の如く我が心は

立ちあがり答へぬ、「吾は感じぬ」と、

否、(その様は、寧ろ)疑と怖とに包まれたる小兒の如くなりき。

されどその盲目的なる喧騒は吾を賢くなしぬ。  
かくて吾は尙泣き叫ぶ小兒の如くなれども、  
而も泣きつゝも父の近きを知る小兒となりぬ。

かくて吾の「我」は再び

誰人も理解し得ざる普遍の「我」を認めぬ、  
而して暗黒の中よりかの自然を通じて働く手、  
人間を造りし手は現はれ來りぬ。

That which we dare invoke to bless ;

Our dearest faith ; our ghastliest doubt ;

He, They, One, all ; within, without ;

The Power in darkness whom we guess ;

I found Him not in world or sun,  
Or eagle's wing, or insect's eye ;  
Nor thro' the questions men may try,  
The petty cobwebs we have spun ;

If e'er when faith had fall'n asleep,

I heard a voice, " Believe no more, "

And heard an ever-breaking shore

That tumbled in the Godless deep ;

A warmth within the breast would melt

The freezing reason's colder part,

And like a man in wrath the heart

Stood up and answer'd, "I have felt"

No, like a child in doubt and fear;

But that blind clamour made me wise;

Then was I as a child that cries,

But, crying, knows his father near;

And what I am beheld again

What is, and no man understands;

And out of darkness came the hands

That reach thro' nature, moulding men.

この「より大なる希望」が、この詩人の心と魂に自己の正しきことを示し、その誤るこ

となき眞實性を尋するに至つた経路は、かの「證明するを得ざる眞理」が、人類の歴史に於て廣く人間の知性に明らかに知られる様になつた経路と同一である。實にこの點に、この詩の普遍性の一要素は存してゐるのである。然のみならず、彼は當時の科學及び宗教に於ける類似せる諸傾向を捕へ、之を深い自己の經驗によつて融合し、以てよく靈的の眞理を説明してゐる。この點より見れば、テニスンは「イン・メモリアム」に於て、當時の暗澹たる懷疑と神々しい希望を述ぶる一の聲となつてゐるのである。彼はこの詩に關聯して、「私は常に必ずしも自分の事を語る詩人ではない、私を通じて人類の聲が語るのである」と云つてゐる。かくて上に述べた如く、當時の高貴な心を持つた多數の人達を惱ましてゐた懷疑に對して、「イン・メモリアム」は力強い緩和劑を供したのである。この偉大な桂冠詩人の軀わくろが地に葬られた時、アベイに集つた群集は、葬列の來るのを待つ間に、吾知らず此の高貴な輓歌のすぐれた章を口ずさんだ。群集の心をかく誘つたものは、單なる感傷の情ではない。それはこの逝ける豫言者が、自己の思ひを述ぶると共に、當時の人々のあらゆる不安困惑の情を彼等に代つて表白

し、また彼等が、彼と共に、彼と同様の経路を以て、「現はされた真理に握られてゐる」慰めを發見するに至つた次第を歌つた所の、あの驚くべき一聯の長詩に對し、今この偉大な國民的悲哀の前に、人々が自らにして發した訴への情であつたのである。生命は永久であること、愛は永久であること、個性は永遠に存続すること、また神は善であること、神のうちに吾等は生き動き吾等の存在を得てゐること、そして神と共に人類は力を合せて、かの

萬物これを指して進む

一つの遙かなる神聖な結末

one far-off divine event

To which the whole creation moves.

に向つて働いてゐること、そして最後に、テニスンが宇宙の永遠な思想と呼んでゐる所の物の充分な肉體的顯現が基督に見出されること——是等のものが彼の思想と信仰の主要な原則である。一八四九年に書かれた「インザオケイション」(祈願)は、信仰

に關するすべての彼の苦闘とその結果とを總和せんとしたものであるが、彼はこの中にかの原則と彼がそれを遵守する精神とに就て自らかく述べてゐる——

神の強き子、不滅の愛よ、

吾等汝の面を見しことなけれど、

信仰により、唯信仰によりて、汝を抱く、

吾等證しするを得ざれど尙汝を信ず。

光と影の是等の天球は汝のもの。

人に獸に汝は生を造り、

汝は死を造る。然して視よ、汝の足は

汝の造りたる頭蓋の上にある。

汝は吾等を塵の中に見捨てじ、



汝は人を造りぬ、彼はその故を知らず、  
彼は己は死すべく造られしに非ずと思ふ、  
而して汝は彼を造りぬ、汝は正し。

汝は人間的にして且つ神的に見ゆ、  
いと高きいと貴き人なる汝。

吾等の意志は吾等の物、吾等その故を知らず、  
吾等の意志は吾等の物、そを汝の物とせんが爲めに。

吾等の小さき組織は皆生くべき日の限りをもつ、  
彼等は日の限りを生きて後消滅す、  
彼等は汝の光の断片に過ぎず、  
然して汝は、おし主よ、彼等よりも大なり。

24

吾等は唯信仰をもつ、吾等は知る能はず、  
それ知識は吾等の見得べき物象に限らるれば。  
而も尙吾等は信ず、汝より  
暗夜の光射し來ることを。その光を輝かしめよ。

知識をしていよ、大いならしめよ、  
されど更に大いなる敬虔を吾等の衷うちに宿らしめよ、  
心も魂もよく相諧和し、舊の如くにして  
然も更に大いなる一の樂を奏でん爲めに。

吾等は鈍く愚かなる者なり、  
吾等は恐れを知らざる時は汝を嘲る。

されど尙、汝の愚かなる者共を助け、  
汝の傲れる世を助けて、よく汝の光を受くるに耐へしめよ。

Strong Son of God, immortal Love,

Whom we, that have not seen thy face,

By faith, and faith alone, embrace,

Believing where we cannot prove ;

102

Thine are these orbs of light and shade ;

Thou madest Life in man and brute ;

Thou madest Death ; and lo, thy foot

Is on the skull which thou hast made.

Thou wilt not leave us in the dust :

Thou madest man, he knows not why,

He thinks he was not made to die ;

And thou hast made him : thou art just.

Thou seemest human and divine,

The highest, holiest manhood, thou :

Our wills are ours, we know not how ;

Our wills are ours, to make them thine.

103

Our little systems have their day ;

They have their day and cease to be :

They are but broken lights of thee,

第二章 「イン・メモリア」—精神的苦悶の記録

And thou, O Lord, art more than they.

We have but faith : we cannot know ;

For knowledge is of things we see ;

And yet we trust it comes from thee,

A beam in darkness : let it grow.

Let knowledge grow from more to more,

But more of reverence in us dwell ;

That mind and soul, according well ;

May make one music as before,

But vaster. We are fools and slight ;

We mock thee when we do not fear ;

But help thy foolish ones to bear ;

Help thy vain worlds to bear thy light.

### 第三章 唯物論に對する答

一八五〇年の「イン・メモリアム」の發表から幾ばくも経たないうちに、この世紀に於ける大きな論争として、科學と宗教との争ひが始まつた。そしてテニスは唯物論の主旨に反抗して自己の信念を擁護することゝなつた。それは彼が懷疑との永い戦ひの後やうやく贏ち得た信念を維持せん爲めに戦はねばならなかつたと云ふ譯ではない。また、好んで一個の論争者となつてその討論の列に加はり、辯護の側に立つて争はうとしたのでもない——テニスはその藝術を理智の戦争の武器となすにたへない。

彼は常に詩人である。唯信仰が科學的な唯物論の霧に包まれて暫くでもその形を消される様に見える時、また昔の疑惑と恐怖とが十分に理解もされない科學の新學說に咬かされて再びその姿を現はす時、テニスは、彼の過去の暗澹たる苦闘の間に深い個人的經驗の動かすべからざる論理によつて的確に證明せられた、かの原理を持ち出し、それによつて曇らされた精神上の視界を再び明らかに澄み上つたものとしたのである。

否それよりも更に、彼の信仰はこの過去に獲得した原理を再び説述することによつてその範圍内容を大にし、信念の度を高めて行つたのである。

かくの如き事情の下に、一八六五年から一八八五年に至る期間即ち科學と宗教の争がその絶頂に達してゐた時に、テニスは多數の詩を書いて、その中に當時の宗教的不安乃至失望の種々な状態に對する自己の感情的想像的な見解を發表した。是等の見解の或る物は極めて思索的のものであつて、遠く形而上學の分野にまで達してゐたが、他の大部分は、感じたり思つたりすることは出来るが、眼に見たり證明したりする事の出来ない眞理、従つて之を發表するにも信條とか形式的な摘要書とかによらないで、詩的想像の自由な無制限な創作によるのを適當とする様な眞理を、不滅にして永久な美の形式の中に現はしたものであつた。特に一八六九年には、「ザ・ホーリー・グレイ・オブ・ア・ソフエト聖杯及びその他の詩」と題する詩集が發表せられた。この詩集の中には、見えざる物の實在——之は前にも述べた様に、彼の精神的哲學の根柢をなすものである——に關する彼の強い信念の最も秀れた暗示的な表現が見られる。またその敵とする科學的思考法の次第に強くなつ

て來る勢力に對して、藝術を以てなされた彼の最も効果の強い辯護が示されてゐる。此の詩集に於て、彼は「アイデルズ・オブ・ザ・キング」(國王牧歌)に、その眞の魅力の大部分を成してゐる深い道德的精神的意義を與へた——それは殊にその中の「ザ・ホーリ・グレイル」と「ザ・カミング・オブ・アーサー」(アーサーの出現)に著しい所である。然し「アイデルズ」の殆んどすべての出來事の裏に輝いて見える此の精神的な美と、その美のテニスンテニスンの宗教哲學全體に對して有する關係に就いては、次の章に別に説かうと思ふ。そして此の章に於ては、主として彼の短い方の詩(その多くは抒情詩)に吾等の興味を置き、彼が之等の詩の中で唯物論的な否定説及びそのうちに含まれるあらゆる論旨に反對して、彼の信仰の根本原理を光彩に富んだ藝術的效果のすぐれた表現を以て述べてゐるあとを見ようと思ふ。

是等の詩は明確に數個の群に分たれてゐる。此の時代に於ける生理學の發途と共に、すべて感覺を以て知らるゝことの出來ない物に關する信念を破壊せんとする露骨な皮肉な氣分が或る方面の人達の間に見はれて來た。「古ザ・エンシエント・セイジ」の中の「浪費の多

い生に疲れた」青年の如きは、かゝる氣分を示す一つの例である。テニスンはこの傾向に反對して、論争的な手段にはならなかつたが、而も強硬にその信念を維持し、精神が實在と永遠性を有すること、宇宙には本質的に精神的な基礎があると云ふことを主張した。そしてこの信念を表白する多くの詩を書いた。加之この時に於て、ダーウインの進化論は人々の心に著しい感動を與へ、テニスンの考では到底證明することは出來ないと思へる様な勝手な推論をその進化論から造つてゐた。殊に良心や情操も人間がその野獸的な祖先より受けた遺産の一部に過ぎないと云ふダーウインの見解は、多くの困難な疑問を起した、人々はこの時代の新しい知識に適應する様な解釋を求めてやまない有様であつた。例へば、このダーウインの見解は靈魂不滅の信仰に反對せんとする當時の人々の議論の強い論據となつた(この信仰はテニスンが基督教の樞要な一點となしてゐる所のものである)。従つてこの時期の彼の數個の詩に於ては、彼は死後の生に對する信念を讀者に強制せんとする様な態度に出てゐる。然しその態度は唯物論者の議論に對抗せんとするのではなく(それでは彼の藝術の墮落となる)、感情

に満ちた言葉を用ひ、詩的想像を表はす形式によつて、來世の光の中にのみ此世の矛盾と失望は報償と融和を見出すことが出来ること云ふ彼の強い信念を述べたものである。矢張之に類する道徳と眞理の意義に關する問題や、若し人間が野や森に住む言葉なき禽獸と同じく唯短い生を受けた不幸な生物であつて、死すれば夢のない永久の眠に落ちて終ふのであるならば、高いすぐれた目的の爲めに献身努力せんとする行爲は、人間にとつて畢竟どう云ふ意義を有するかと云ふ問題や、何故自然及び人間の世界に苦痛があり、人生に罪惡があるかと云ふ神秘な問題や、また歴史には様々な矛盾があつて、種族も個人も、恵み深い全智全能の創造主の存在を否定して屢々野蠻の状態に退歩するが如く見える傾向に關する問題や、更に唯物論の論旨が人間の行爲の規準とせられる時それが人格の上に及ぼす破壊的な影響に對する彼の強い意識や、また唯物論が神と靈魂を否定せんとして殺伐な努力をなし、然も人間の精神的要求や希望や信念を到底満たすことが出来ないこと云ふ憎むべき實狀に對する彼の感情や、——すべてかかる問題が彼の關心の主題となり、この時代に書かれた彼の詩の大部分の主旨を成したのである。

たのである。

テニスンが彼の心を占めてゐる哲學的理想主義を最も偉大な美と力の形式に包んで表出した此の時期の詩の中でも、特に此點に意義の深い三篇の詩がある。その一つは「ザ・ボイス・オブ・ザ・ピーク聲」と「ザ・ハイ・アー・メン・シイ・ズム峯」であつて之は一八七四年に發表せられた。次は「ザ・フレイグ・オブ・ザ・ストーン花」の詩であつて、之も「ホーリ・グレイル」と同じ詩集の中に發表せられてゐる。是等の詩はその主題とする所が相似てゐて互に關聯してゐるが、然もそれ／＼この詩人の思想の種々異つた方面を現はしてゐる。その思想の要點は、唯一の實在は靈魂であること、全物質界は唯「空間と時間の形式のもとに神の力が現はれたもの」に過ぎないこと、そして神は自然と生命のすべての形式のうちに内在すると云ふこと、即ち神はすべての物のうちに流動し、すべての物を支へ、すべての物に神秘的な神性を附與するものであると云ふことである。「若し神が唯一瞬間でも宇宙からその身を引いたな

ら、あらゆる物は消えて無となるであらう」と彼は常に云つてゐた。テニスンカーペンダーは機械的な宇宙観や「大工の神」の觀念に反對するばかりでなく、感覺の範圍外に在る總ての物に關する信念を拒まうとする科學的な氣分とも戰つた。そして此の點にテニスンがその時代になした意義ある奉仕が存してゐる。即ち「神聖にして永遠なる物」に關する彼の崇高な觀念に美しい想像的な表現を與へることによつて、當時の哲學者や宗教家に先だつて、テニスンは、成長し生活する宇宙の中に見らるゝ創造の過程に關する科學の結論と、靈魂の實在と神の人格性に關する心の直覺とを調和せしむべき道を開いたのである。

「聲と峯」の詩に放ては、この詩人は感情の籠つた活々した調子を用ひ、内容によさはしい崇高にして美麗な象形を借りて、物質なる物は實際上變動してやまぬものであり、唯靈的の物のみこの宇宙に於ける唯一の永續的な實在であると云ふ彼の信念を表白してゐる。終夜彼は汝が

岩の洲の上に轟く

Rave over the rocky bar.

音を聞き、また終夜彼は峯が沈黙の中に立ちその空を靜かに星の光つて行くのを見まもつた。「おゝ峯よ、お前は聲を持たないのか」と終に彼は問を發した。するとかく答へる聲が彼の耳にとゞいた——

「私は峯の聲だ、

私は吼え叫ぶ、私は崩れ落ちるから。」

“I am the voice of the Peak,

I roar and rave, for I fall.”

これが自然の教ふる所である。峯や谷や海や星の叫びてやまぬ言葉である——即ち何物も永續し得る物はない、すべての物はその定められた運行の道を行きつくせば滅亡の中に陥らねばならぬ、外的の世界は次第に老朽して終に煙の如く消え去り、再び見るべくもなくなつて終ふと云ふことである。然しこの峯の言葉に對する答へとして、我が詩人の心は、彼の強い信念即ち感覺の世界の彼岸に變化も衰滅もしない一つの世

界永久に存続する一つの世界があると云ふ信念を吐露して居る。

峯は高い、そしてその頂は

落日の焰に輝いてゐる。

峯は高い、星も高い、

然し人間の思想は更に高い。

深海の下の深海、

高山の上の高山！

吾等の聴覚は聴覚でない、

吾等の視覚は視覚でない。

The Peak is high, and flush'd

At his highest with sunset fire ;

The Peak is high, and the stars are high,

But the thought of a man is higher.

A deep below the deep,

And a height beyond the height !

Our hearing is not hearing,

And our seeing is not sight.

是はまた「より高い汎神論」の詩が暗示する所である。この詩は形而上學協會の席上で初めて發表せられたものであると云ふ事情より考へて見ても、たしかにテニスン  
の理想主義的哲學の全意義を表はさうとしたものに相違ないが、然しその真理の表現  
にあくまで深遠な趣を有し、その形式は具象的であり想像的であつて、之を解説しよ  
うとすると、その美の要素の何れかを犠牲にしなければならぬほどである。この詩に  
於てもまた彼は、眼に見ゆる事物は眼に見えぬ永久的な事物を包み隠してゐるか、或



はやつと微かに表現してゐる幻影に過ぎないと云ふ自己の信念を宣言してゐる。彼は問うてかく云つてゐる。「物質的の宇宙の諸形態——即ち太陽や月や星や山や海などは、單に無限な不可思議な言語を絶した生命の發現ではないか、所謂統へ給ふ神の幻影ではないか？」

この幻影は神ではないか？ よし神は吾等に見ゆる如き形のものでなくとも。

Is not the Vision He? tho' He be not that which He seems?

116

こゝにテニスは恰も古の素朴な時代にポーロが云つた言葉——「それ人の見ることを得ざる神の力と性とは造られたる物により世の創めよりこの方さとり得て明らかに見るべし」と云ふ言葉を、この後の世の複雑した知識の状態に新しく適用してゐる様に思はれる。それでも人間はこの神の力と性を十分にさとることは出来ない。彼は唯ぼんやりその一部を知り得るのみである。然しこれは、テニスの考へによれば、人間が有限な地上の制限の中にくゝられてゐることから生ずる自然の結果である。「この體や手足の重み」は天と地の形と同じく、人間の「神よりの分離」を表はす「標示であり象徴」である。

世界は汝にとつて暗黒である、その暗黒である理由は汝自身である。

Dark is the world to thee : thyself art the reason why.

然しかく有限な眼を以て神を見ることは不可能で、それは唯信仰の眼によるの外ないけれども、ともかく神が存在してゐること、そしてあらゆる人の心は神と直接交通して最も親しく活々した交りを結び得ると云ふことは、テニスのかたく主張した所である。

117

彼に語れ、彼は聞く、靈と靈は相逢ふことが出来る——

彼は呼吸よりも親しく、手足よりも近い、

Speak to Him, thou, for He hears, and Spirit with

Spirit can meet—

Closer is He than breathing, and nearer than

第三章 唯物論に對する答

このことはテニスンにとつては人間の経験の最も大なるまた最も確かな事實である。それは神と靈とは各々の人格であつて、然も神秘的な測るべからざる結合によつて二者一となり、この宇宙の偉大な唯一の實在をなしてゐるからである。人間は、之までこの神秘を言表し或はそれを否定しようとした。また神に定義を下し、神の性質を證明せんとした。智者は神は法則であると宣言する——そしてそれによつて我が詩人は吾等に心楽しく悦ぶべきことを勧める。即ち、

若しも神が法則によつて雷鳴を發せられるなら雷鳴も尙ほ彼の聲であるから。

*For if He thunder by law the thunder is yet His voice.*

然し他の者達は、新しい科學の言葉と精神を以て、神を一の抽象的な物となし、却て法則こそ神であると云ふ。更に他の者になると、神なるものは何れにせよ決して存在しないとまで云ふ。テニスは人々がこの様にその「無限者」に對する觀念を異にするのはあやしむに足りない、それは彼等は各々自己の制限の範圍のうちで思考しな

ければならぬからであると思ふ。

吾等が見ることの出来る物も皆池に立てた眞直な棒が曲つて見える様なものであるから。

人間の耳は聞くことが出来ない、人間の眼は見る事が出来ないから。

然し若し吾等が眞に見たり聞いたりすることが出来れば、この幻しは——これは神ではないか？

*For all we have power to see is a straight staff bent in a pool.*

*For the ear of man cannot hear, and the eye of man cannot see ;*

*But if we could see and hear, this Vision—were it not He ?*

そしてまた「ひゞ破れた石垣の花」の詩の中でも、彼は眞摯な印象強い言葉を以て世界が不可思議なある一要素のうちに結合してゐることを述べ、その要素は現象の下に隠されてゐるが、自然界のすべての事物は皆大なる物も小なる物もこの要素を分有してゐると説いてゐる。

ひび破れた石垣の花、

私はお前をその裂け目から摘みとる、

私はこゝにお前を、根諸共に、私の手につかんでゐる、

小さな花——然し若し私がお前は何であるか、

根も、何もかも、含めてお前は何であるかを知ることが出来たら、

私は神と人が何であるかを知ることが出来るのだ。

Flower in the crannied wall,

I pluck you out of the crannies,

I hold you here, root and all, in my hand,

Little flower—but if I could understand

What you are, root and all, and all in all,

I should know what God and man is.

然しそれだからと云つて、テニスン神はその全體に亘つて到底知ることが出来な

いものだと考へてゐるのだと誤解してはならない。彼は「感覺の範圍外にある物はすべて解らない」としてその無智に強いて理屈をつけてゐる態度——感覺以外の物に信仰の基礎を置くことは出来ないとその無能力を公言してゐるもの」だと云はれてゐるか。ハクスリの不可知論を奉ずる者ではない。またロメイネズが説明して、若し神が在つても彼は自己を人間に啓示することは不可能だと云つてゐる様な、ハーバート・スペンサー派の不可知論でもない。それは寧ろ聖ポーロが「われら今鏡をもて見る如く見る所朧ろなりされどかの時には面をあはせて相見ん吾いま知ること全からずされどかの時には我が知らるゝ如く吾知らん」と云つてゐる様な高級不可知論とも呼ぶべきものである。それはすべての感覺の制限と人間の思考の有限な状態を認め、無限な物は如何にするも有限な物によつて理解することは出来ない」と云ふことを認めながら、而も吾々の心と吾等天性の高い直覺を通じて絶えず求め絶えず見出し、靈魂が常に自己を意識する如く吾等の源泉たるかの「神聖にして永久なる物」の實在を意識せんとする、哲學的にして同時に基督教的な心意の態度である。彼は常にかく問うてゐた。「天

啓なるものは吾等の直視することの出来ない愛の神の輝かしい榮光をやはらげ隠す帷ではなからうか、而もそのためにそれは吾等の視力や吾等の進歩を阻害する様なことをしなす。」

然し是等の詩よりも一層思索的な、而もその主調は崇高で想像的な神秘に富んでゐる一つの詩がある。テニスンはこの詩の中で、神と靈魂の性質及び兩者相互の關係に關するその思索を哲學的抽象論の深淵にまで押し沈めながら、根強い感情の力によつてその思索を再び詩歌の野に引き上げてゐる。取ら「デイ・ブロフアンデス」(深淵より)と云ふ意味の深い表題の下に、一八五二年彼の長子の誕生の日に彼がその時の感想を記した「二つの挨拶」と、デヨウエトの頼みでバリオル教會の聖歌として作つた「人間の叫び」と云ふ二つの詩が收められてゐる。二つの挨拶の中に初めの方の挨拶は、唯彼の子供が

暗闇から笑ひつゝ出でゝ来る

Breaking with laughter from the dark.

のを迎ふる氣高い嚴肅な挨拶と、幸福な生涯平和な晩年安らかな死に對する美しい祈禱とに過ぎない。然しその第二の方の挨拶は、美しい象形と緊張した感情に色づけられた一の深遠な思索である。その思索はかの實在の神秘な海の中にある靈魂の源泉に關するものであつて、如何にその靈魂がその海の深みから湧いて来るか、如何にそれがそれに對しては吾等の世界は唯之を取り巻く岸に過ぎない

かの吾等の見る世界の内部にある眞の世界から

From that true world within the world we see,

Whereof our world is but the bounding shore.

出て来るか、と云ふことや、また靈魂の地上に於ける生活とその高い永遠な運命とに關するすべての物語に就いて思考してゐる。

吾等の世界にあらざる世界に於て神は云ふ、

「吾人を造らん」と。かくて人となるべき物は、

何人も仰ぎ見まもるを得ないかの一つの光より、

日と月とあらゆる物の影をもて照り輝ける  
此方の岸に近づき来る。

For in the world, which is not ours, They said,

“Let us make man,” and that which should be man,

Drew to this shore lit by the suns and moons

And all the shadows,

するとその靈魂は、自己の影と、自己の個人的存在を示す肉の印との中に包まれて  
半ば見えなくなつて終ふ。それは生れると共に泣き叫ぶ、その故は出生は神秘への  
追放であり、有限な状態の苦惱への追放であるからである。その状態は、結局

吾等の無常の面被であり、

無限なる物の碎かれたる亡靈

our mortal veil

And shattered phantom of that Infinite

に過ぎない。その靈魂の運命はその生命より發出する所のものを選んで、限りなく自  
由に非決定的に、獨自一個の人として生きるにある——

そして尙幾多の生を通じ

死より死へと向ひ、そして

ますます神に近づく、神は物質的の仕事や

有限的無限の仕事をしなす、

彼はこの大いなる奇蹟を行ふ、汝が汝であり、

汝自らの行爲をも世の中をも動かす力を有してゐると云ふ奇蹟を。

and still depart

From death to death thro' life and life, and find

Nearer and ever nearer Him, who wrought

Not Matter, nor the finite-infinite,

But this main-miracle, that thou art thou,

With power on thine act and on the world.

他方神の性質や屬性に關しては、テニスは常に多くを語らない。「私は神の名を呼ぶことを憚る」と彼はよく云つてゐた。それで「古ヘブライ 聖ヘブライ」の中では、彼は神を指して「名なき者」と呼んでゐる。然し彼は人間が神にたよらうとする心に就いては深い知覺をもつてゐて、この心を「デイ・プロファンダス」の最後の部分に述べ、この部分に「人間の叫び」と云ふ表題を與へたのである。この詩に於て彼は神に關する自己の概念を抽象的に哲學的に表現せんと欲して、「無限の理想、測るべからざる現實、無限の人格性、神聖にして常に讚美さるべきもの」と云ひ、更に之を次の如き敬虔と謙抑の情に燃えた言葉をもちて結んでゐる。

吾等は吾等の無なることを感じる——それはすべての物は汝であり又汝の中に在るからである。

吾等は吾等の何物かであることを感じる——それも亦汝から來たものである。

吾等は吾等の無なることを知る——然し汝は吾等を助けて何物かたらしめるであら

う。

汝の聖名、神聖なれ——ハレルヤー

We feel we are nothing—for all is Thou and in Thee;

We feel we are something—that also has come from Thee;

We know we are nothing—but Thou wilt help us to be.

Hallowed be Thy name—Halleluiah!

然し當時の宗教論争に於ける他の方面の問題が、テニスの心に、この靈の實在の否定と云ふ事を中心とする反動より更に大きな想像と感情との反動を起した。それは即ち良心や感情は人間がその野獸的な祖先より受けた遺産に過ぎない、と云ふダーウインの見解を基とする進化論的哲學の推論に伴つて起つた問題である。元來この宗教論争は、上にも説いた如く幾多の方面を含んでゐた。そしてその中でも、テニスの心にとつて重要であつたのは、靈魂不滅の問題と、唯物論的概念に於て人生が如何なる目的と意義を有するかと云ふ問題に關するもので、これは人間の來世なるものを否

定するより當然に生じた問題である。既に「イン・メモリアム」を論じた章に於て、如何にテニスンが不滅と云ふことに對する直覺を、少くともこの地上の生物を待つ他の世界が實在することを示す一の強い標示だとして、之に固く縋りついてゐたかと云ふことを説いた。「若しあなたが神なるものを容認し、そして神がこの來世に對する強い直覺を容認するならば、慥にそれだけでもある程度までこの眞理を推定し得ることとなる。吾吾は吾々を人間と爲したあの偉大な希望を抛棄することは出来ない」と彼は云つた。然し自己の天性の深い奥所に斯る不滅を示す種々の證しを見出したからと云つて、テニスンは（既に明らかなる如く）、その信仰の基礎を只是等の證しにのみは置かなかつた。即ち彼の初め懷疑と戦つた時期の間に、他の一層權威に富める信念が彼の意識に成長して來た——それは靈魂はより高いより良き世界に於て、その進歩を繼續すればこそ、初めて、この地上の有限的な束縛のもとに過される存在がその意義を有して來、靈魂の有する可能性を十分に發揮することも出来ないで終る様な恨みも免れることが出来るのだと云ふ考である。「イン・メモリアム」の初めの方の部分——

殊に三十四節三十五節及び五十六節に於て、彼は若し自然なるものが、唯物的哲學の唱へんとする如く、眞に人間の高貴な精神的事業に何等の價値を置かず、眞理と正義に對する人間の愛を無價値なるものとなし、神は愛であり「そして愛は造物主の終局の法則である」と云ふ人間の信頼心を無現し、人間の讚美の歌も禮拜の會堂も打ちのけて終ふならば、人生はまことに醜惡にして無益な自己矛盾に過ぎないと叫んでゐる。唯未來の生の光によつて照す時のみ、テニスンはこの地上の生の價値を見ることが出来た。不滅と云ふことは、彼にとつて、吾々のこの死を免れ得ない状態の上に記された矛盾を説明するに缺くべからざるものであつたのである。

そしてこの考は今進化論が人類にとつて最も貴重な永世の信念を否定せんとする有様であつた時、テニスンの信仰を支へる強固な基礎となつたのである。彼の年齢が進み、老年に伴ふ避け難い幻滅の感が彼を襲つて、人間の地上の生活の榮枯盛衰の跡に含まれる恐るべき矛盾と、唯物的考察に於て見らるゝ人間の高級な本性の無目的な有様とが一層強く彼の心に感じられて來ると共に、このデレンマは益々冷酷無情に彼を

責め、その結果彼をして愈々固く永生の信念にたよらしめて、之を人間の心を眞に満足せしめ得べき唯一可能の説明だと信ぜしむるに至つた。テニスンのこの生の幻滅感の發展の跡は、「モウド」(一八五五年)と「ザ・ロックスリー・ホール・シクステ・イヤーズ六十年後のロックスリー・ホール」(一八八六年)の二つの詩に明らかに記録せられてゐる。唯注意すべきは是等の作にあつてはテニスンは本來の自己の立場から語つてゐないことである。即ち前者にあつては、病的なヒステリ性な半ば狂した一青年として語り、後者にあつてはその青春の希望のすべての光輝は人生の荒涼たる現實の中に消滅したるが爲めに人類と文化に就て不快な失望的氣分を有してゐる一人の口やかましい老爺として語つてゐるのである。是等の詩の吾等に與ふる物は、その時代に對する恐るべき苛烈な難詰である。それがあまりに烈しい爲めに、多くの讀者は作者の劇的動機を忘れてそを冷酷な皮肉な厭世觀として彼を攻撃した程である。實際人生と文化の甚しい禍惡を恐ろしき程明瞭に目睹した者でなければ、かくの如き詩を書きかくの如き人物を案出することは出來ない。然しかく悲觀的に見れば、あらゆる反對撞着がこの地上の人生を形成してゐる如く思はれる

にも拘らず、破られた希望や阻まれた企畫や外れた目的や、すべてかゝる矛盾が波の如く打ち騒いでゐるにも拘らず、テニスンはこの最も暗澹たる絶望の氣分のうちにあつて、尙ほ神の善と道德の現實性とそして來世に對する人間の希望の眞實なることを信じ得て、そこに満足な斷定と解決を見出したのである。

このデレンマの相尅の有様を最も活々と現はしてゐるのは「ザ・ワイド・ワイルド廣漠」と題する詩である。此詩は一八八五年に發表せられ、従つて信仰と疑惑との間の争鬭の此の方面に關する彼の最後の表白の一つと見るべきものである。此詩に於て、テニスンの眼はあまねく人生の廣野に行き亘り、人間のすべての勞苦罪惡悲哀を眺めてゐる。只その中に一點明かに輝き恐るべき禍害にもその光を暗まされない所がある——それは家庭的情愛の温く燃え輝く爐邊である。この場景の神秘に胸ふたがりまたその複雑せる趣きに茫然として、彼の心はかの執拗な問を呼號する。「此の物すべての値する所は何ぞ？」と。その人生の一方の側には、虚偽が眞實を征服してゐる。勇氣は正道にも邪道にも同じ勢をもつて迸出してゐる。信仰は懷疑の暗の中に姿を失つてゐる。罪知らぬ



者がその純潔をおびやかされて苦しんでゐる。

朝の星、日の出の望み。夕べの暗鬱、

かくて生は終る。

Star in the morning, Hope in the sunrise ; gloom of the evening,

Life at a close.

然るに一方の側には、快樂がある。するとそれに伴つて蛆虫が屍から這ひ出る様な苦痛がある。富める者が數人の嬖妾を擁する陰には「清貧洗ふが如き」有様に苦しむ者がある。名聲があれば、その影として誹謗が伴ふ。「死の息を引きとる間際まで」誓を守る者もあれば、誓を立てると同時に之を破る様な者もある。こゝに一人の人があ

132

る。  
彼は瞬間の肉慾の儘に生を送り、その肉慾を満しつゝ心を持たざる肉塊として死す

る。  
that has lived for the lust of the minute, and died in the doing it, flesh without mind ;

するとまたこゝに他の人が立つてゐる、

彼はすべての肉を十字架につけ、終に我なるものを人類の愛の中に殺して終ふ。

that has nail'd all flesh to the Cross, till Self died out in the love of his kind.

すべて是等の光景を、今テニヌンの眼は眺めつくした。そして終に強い疑惑の念に促されて、彼はヨブと共に叫ぶ。「このものすべての値する所は何ぞ？」——

哲學や、すべての科學や、詩や、祈禱の聲の抑揚や、彼等は果して何ぞ？

すべて高貴なるもの、すべて醜劣なるもの、すべて汚れたるものすべて美しさも  
のと打交るは？

133

すべてこの有様は何ぞ、若し吾等皆たゞ終に吾等自らの屍棺として終り、

茫漠たる世界に呑み込まれ、沈黙の中に姿を没し、意味なき過去の深海に溺死する  
ものとせば？

そは暗闇に唸る蚊の聲か、巢の中に荒るる蜜蜂の暫しの怒りに非ずして何ぞ？——

.....

平和あれ！ 吾は彼を愛したり、尙永久に彼を愛す。死せる者は死せるに非ず尙生きたり。

What the philosophies, all the sciences, poesy, varying voices of prayer?

All that is noblest, all that is basest, all that is filthy with all that is fair?

What is all, if we all of us end but in being our own corpse-coffins at last,

Swallow'd in Vastness, lost in Silence, drown'd in the depths of a meaningless Past?

What but a murmur of gnats in the gloom, or a moment's anger of bees in their hive?

.....

Peace, let it be! for I loved him, and love him forever: the dead are not dead but alive.

彼はまた矢張かう云ふ氣持を以て次の如く云つた。「偉大な想像力の強い人が、深く生き苦しみ思ひ働きながら、尙死後に靈魂の進歩の繼續することを疑ひ得ると云ふのは、私の了解に苦しむ所である」と。

然しながらテニスンのはかくの如く永生と云ふことに人生の永久の迷路の解決を見出

したけれども、尙彼は時々その心を悩まされることがあつた。それは多くの禍が文明のうちに固有してゐて、少くとも人間の歴史の進路を指導し天地創造の偉大な目的を成就する様な恵み深き全能の力の存することを否定する様に思はれる事實を彼が反省した時であつた。かゝる悩みの氣持を以てテニスンはその詩の中に、アーサーが死に迫つて彼の偉大な願望が空しく滅びすべての彼の高貴な計畫が奸惡な者共のために破れて終つたのを見た時、彼をかく叫ばしめてゐる――

「吾は神を星辰の輝きの中に見ぬ、

吾は神を野に咲く花の中に認めぬ、

されど人に對しその爲す所に神を見る能はず。

.....

おゝ吾は！何故この吾等の周圍にありてはすべて、ある力足らざる神が世界を造りたる如く見ゆるならん？  
彼は自己の欲する如く世界を形造る力なく、

すぐれたる眞の神が遠くより之を見て  
その世界に入り來り、之を美しく改め造るを待つのみ。」

“I found Him in the shining of the stars,

I mark'd Him in the flowering of the fields,

But in His ways with men I find Him not.

.....

O me! for why is all around us here

As if some lesser god had made the world,

But had not force to shape it as he would,

Till the High God behold it from beyond,

And enter it, and make it beautiful?”

然し人間の進歩と云ふ問題が斯く彼の心を壓迫する様になつた時、彼は常に神の善に對する彼の信念にたより、また彼一家の進化的原理にたよつて行つた。その進化説

は彼の想像力によつて擴大せられて狭い物質界を脱して人類の進歩と云ふ域にまで達したもので、かの「イン・メモリアム」の時代に彼に希望を興へたのもこの思想に外ならない。即ちあの時には、彼の逝いた友が彼の思想にとつて、未來の進歩せる人類の先驅——今日の人類のすべての希望や苦惱の花と果を摘み入るべき完成せる人類の先驅と思はれる様になつたのである。そして是がまたかの「王女」の希望であつた——

吾々のこの美しき過去の世は唯小兒の尙

「歩み車」に乗れるが如し、忍べ！ 彼に時をかして

その四肢の用を學ばしめよ、手ありてそを導かん、

This fine old world of ours is but a child

Yet in the go-cart. Patience! Give it time

To learn its limbs: there is a hand that guides.

「モウド」の中では年少の犬儒主義者をして人間の製成に就いてかく語らしめてゐ

る——「彼は今第一である。然し彼は是でもう發達の最後であるか？」と。そして終りに彼の一番晩年の詩の一つであつて彼が世に出した最後の詩集（一八九二年）の中に收められてゐる「曉」<sup>ダ・ドーン</sup>と呼ぶ詩のうちに、テニスンは自ら質問を發して自ら之に答へてゐる——「人間の進歩は遲鈍で不安定であるか？ さうかも知れない。然し人類は尙その前途に完成に達すべき歳月を有してゐる」と。

當時の進化論的哲學の第二の推論は道德に關するもので、絶對的道德律の否定と云ふことを意味してゐたが、この推論も、先の靈魂の不滅と云ふ問題に關聯し人間の最も高尚な天性は唯肉體的過程によつて進化するとする推論に劣らず、テニスンの心を脅やかした。この見解に従ふと、人類の道德的屬性なるものは、數十世紀に亘る人間の共同生活のうちに傳へられて來た經驗の總和であり、人間は唯社交的生物なるが故に道德的生物であると云ふことになるのである。例を挙げれば、デョージ・エリオットの教への如きは即ちこの説である。彼女にとつては良心は「確立せる法則の內的發言ではなく」て、彼女の云へる如く「吾等の記憶と同様に種々雜多なる感情の發する

聲」であつて、悪行に對する處罰は、彼女の作アダム・ビードの中に牧師アーウィンがアーサー・ドニソンに語つてゐる「行為の處罰」と「内心の苦惱」の外はないのである。然しテニスンは神の慈愛と來世の信仰に取り違つた如く、道德なるものゝ實在に對する信仰をも固く握つて放たなかつた。彼にとつてはワーズワースと同じく、義務は常に「神の聲の嚴格な娘」であり、道德と眞理は世界の創始以來絶對無制限のもので無限な神の性質そのものゝ中に含まれてゐるのである。まことに、テニスンの前の靈魂に對する信念は後のこの道德の信念の一部をなしてゐる。彼は永生と云ふことを道德の一屬性と見做した。そは恰も彼が道德を永生の一の證據となし、また人生は——その表面に見らるゝ矛盾や失敗や落膽にも拘らず——決して怠惰な夢でも徒らな勞働でもないと云ふことの確實な證憑と見做したと同じである。たゞ永遠な活動のうちにてこそ道德は完全な自己實現を發見する。そしてそれが彼の望む唯一の報償であるのだ。テニスンはこの思想を「六十年後のロクスリ・ホール」中の數行に歌つてゐる。その數行は、彼の末の方の息子のライオネルの死（一八八六年四月）のすぐ後に書か

れたもので、ライオネルの主な特性を叙述した數個の對聯カブレットに續けられてゐる。

眞理は眞理のため、善は善のため！ 善きもの、眞なるもの、潔きもの義しさも

の——

彼等より「永久に」なる魅力を取り去れ、されば彼等は碎けて塵とならん。

Truth for truth, and good for good! The good, The True, The Pure, the Just——

Take the charm "For ever" from them, and they crumble into dust.

一八六八年に發表せられた「報償」ウエイゲスなる詩に現はれてゐるのも矢張之と同一の思想で、唯こゝではそれは少し抽象的に表現せられてゐる。

罪の價は死である。若し徳の價が塵であるならば、

どうして彼女はこの蠱蠅の生に堪へる覺悟を持つことが出来ようか？

彼女は祝福された者の島や義しい者の静かな席を望まない、

金色の森に休らうことも夏の空に身をさらすことも望まない、

彼女に倦まず進みて死なざるその働きの價を與へよ。

The wages of sin is death : if the wages of Virtue be dust,

Would she have heart to endure for the life of the worm and the fly?

She desires no isles of the blest, no quiet seats of the just,

To rest in a golden grove, or to bask in a summer sky :

Give her the wages of going on, and not to die.

然し個人にとつて道德に對する献身と高貴な理想の熱心な追究とは畢竟如何なる價を有するのであるか？ 是れ唯物論の否定的學說と永生及び道德律の神的な性質の否認とから生じた當時の多數の人達の疑ひであつた。ポーロはこの疑問を彼の書翰の一

に述べてかく云つてゐる——「苦しわれ人の如くエベソに於て獸と共に闘ひしならば何の益あらん乎もし死し者甦らずば飲食するに若しかず我ら明日死ぬべき者なれば也」。そしてテニヌンは之を一層近代的な言葉で、一八八九年に發表した彼の詩「進化論者バイアン・エツォールによりて」の中に述べてゐる。

若し我が肉は獸より來り、我靈は定めなくして架空の物語の如きものならば、

何ぞ朝の日の輝ける間に感覺の悦びに身をひたさる？

吾、すぐれたる獸として我が獵犬の群のうちに厩舎の中に

青春と健康と門地と財寶と心のまゝなる女性と美酒とを享樂せざる？

If my body come from brutes, my soul uncertain, or a fable,

Why not bask amid the senses while the sun of morning shines,

I, the finer brute rejoicing in my hounds, and in my stable,

Youth and Health, and birth and wealth, and choice of woman and of wines?

この疑問に答へた人はテニスンと同時代の人達にも多くある。その答は人によつて色色であるが、例へばマシエー・アーノルドは、基督の神としての權威を排斥して彼の教への倫理的内容に執着した。そして「ザ・ベター・バート」と云ふ美しいソネットの中で人々に警告して若し來世なるものがないならば「此の世の調子を高くせよ！」と云つてゐる。

天國に吾等の罪を調べる判官はゐないのか？——

それなら、一層、嚴肅に、内心の判官に服従せよ！

Sits there no judge in Heaven our sin to see?—

More strictly, then, the inward judge obey!

ジョージ・エリオットも亦基督教の神的命令を否認したが同時に基督教の精神は何處迄も之を保つて行かうと思つて、神の奉仕の代りに人類の奉仕と云ふことを唱へ、人生の適當な倫理的的目的として、人類の善の爲めに盡さうとする自己犠牲と自己否定の宗教を建設しようとした。

然しテニスはかくの如く宗教から道德を、信仰から行爲を引き放して考へることは出来なかつた。「基督教が神的な道德性を持ちながら、人の子たる基督と云ふ中心人物を缺如するものとせば、それは冷たいものとなつて終ふ。宗教にとつてその暖みを失ふと云ふことは致命的なことである」と彼は云つたことがある。「イン・メモリアム」の初めの方の章(第三十三章)に於ても、彼は人格と云ふものが如何に信仰によつて影響せられるか、少くとも部分的に制限を受けるかと云ふ問題を考へて居るが、

彼はこゝに「信仰の形式を持たぬ信仰」を見出すことによつて自分で「より純な空氣に到達した」と考へてゐる様な人々に對して警告を與へて、信仰は形式を通ずることによつて却つて屢々「善に對して一層敏く」なり、人間は彼等が放棄した信仰形式に現はされてゐる様な「その様な型を缺如するが爲めに却つて」純潔と善良と奉仕とに失敗することがあるものだと言つてゐる。そして是はまた彼の後期の詩の多數にも現はれてゐる思想である。○「五月の希望」(一八八二年)は「誰人にも信義を守らぬ、學說で固めあげた様な薄つぺらな人間」に關する劇的研究であるが、この作の中に、テニスン<sup>サテロニス・オプ・メイ</sup>はドラと云ふ人物をして、この事柄に關するテニスン自身の意見だと思はるゝものを云はしめてゐる——

宗教を持たない靈魂——

お母さんはそんなものは丁度舵も

錨も羅針盤もない船の様なものだといつもおつしやいました——

風のまゝにあちこちに吹き流され

風があればすぐこはれて終ふ様な——

A soul with no religion——

My mother used to say that such a one

Was without rudder, anchor, compass——might be

Blown every way with every gust and wreck

On any rock——

またも一つテニスン自身の思想を含んでゐるやうに思はれる劇的表現が、「小兒病<sup>イン・ヤ・チルド</sup>院にて」(一八七二年)と云ふ憐れ深い小さな詩の中の看護婦の言葉の中に見出される——

おう、どうして私にこんな所で仕事が出来ませう、もしその世界の望みと云ふものが嘘のものでしたら?

O how could I serve in the wards if the hope of the world were a lie?

然しこのことがテニスンにとつてその問題の全部ではなかつた。信仰は彼の心にと

つて行爲の根本原理であり義務は宗教より咲く花であつたが、かくして果された義務そのものがまた宗教的精神的識見の源となつて、靈魂が精神的眞理の深い神秘に入つて行くその主要な道筋の一つとなると考へられた。「人もし我を遣し、者の旨に従は、此の教の神より出るか又己に由りて云ふなるかを知るべし」と云ふ基督の言葉は、彼にとつて決して無意味な言葉でなかつた。それは豊富な個人的經驗によつて試験せられた一の深遠な信仰個條であつた。かくてかの「古ザ・エリント・セイザ 聖」はその相手の青年に警告して、信仰を得ざる事を徒らに悲しむをやめ、進んでその同胞を助け自己の内なる野獸性を抑制し、「肉慾の暑き沼地」を去つて彼の

肩を車輪にあてがひ

祝福の峯に登らん

uphill shoulder to the wheel,

And climb the Mount of Blessing.

ことを勧め、その峯より恐らく彼は

高まり行く峯の幾十の列のかなた、

夜と影の境のかなたに——

人の世を超えたる高さ天の曙の

瑞象スワウの峯の頂きに明け来るを見ん

A hundred ever-rising mountain lines,

And past the range of Night and Shadow—see

The high-heaven dawn of more than mortal day

Strike on the Mount of Vision.

と教へた。是がまた「ウエリントオーロ・オン・サ・デス・カフ・サ・ユー・カ・ホフ・ウエリント 公の死を悼む歌」(一八五三年)の、あの崇嚴な音樂の下に輝いてゐる思想であつて、それは後ち更に「聖ザ・ホーリー・ソング・レイク 盃」の詩の中に一層すぐれて美はしい表現を持つことゝなつたのである——

常に彼女(義務)の命に従ひ、

心と膝と手を暫し休むこともなく、



長さ山峽やまがほを経て遠き光へと

登り行き、終にその地に達し得たる者は、

神自ら月となり日となれる

輝ける高地の上に迫りて

「務め」の巖いはは、鱗の形して突出でたるを見む。

He, that ever following her commands,

On with toil of heart and knees and hands,

Thro' the long gorge to the far light has won

His path upward, and prevail'd,

Shall find the toppling crags of Duty scaled

Are close upon the shining table-lands

To which our God Himself is moon and sun.

それ故テニヌンはこの道徳神及び靈魂の實在に對する深い信仰を有し、また活き生

きした深い宗教經驗はすべての真正な高い道徳の源となると共に、一方義務の實踐は靈的洞察を深める手段となると云ふ強い確信を有してゐたのであつて、彼にとつてこの地上に於ける個人の唯一の務めは、最高き者の命令に背かず内心の眼の見る所に従つて行くことであつた。かくの如き服従からのみ人格を高め生活を惜めるものが流れ出て來るのである。そして之が「道徳は蟬蛸の如き人間にとつて如何なる價值を有するか」とか、「遠大な理想を追窮することは無益な勞苦ではないか」とか云ふ疑問に對するテニヌンの答であつたのである。それはまた個人の生涯に於ける惡の存在の理由でもあつた。そしてテニヌンは人間の肉體組織が初期の野獸的な形から發達して來たのであると云ふ進化説を容認し、惡と善との争闘と云ふことを、當時の科學の術語を用ゐて、之を野獸の性質とそして人間がこの世界にある間は之を連結せられてゐる彼の靈的性質との間の争闘だと説明してゐる。斯て一八四四年「ザ・ヴェスチジズ・オブ・クリエーション」(創造の跡)の發行せられた數年前、彼がその友に讀んで聞かせた「イン・メモリアム」中の數節のうち、彼は人間に勸めて、

よろめく牧神、肉慾の宴うたげより、  
立ちあがり、逃れ行けよ。  
昇れ、獸の性さがを逐ひ、  
猿さしちや虎の性を死せしめよ。

arise and fly

The reeling Faun, the sensual feast;

Move upward, working out the beast,

And let the ape and tiger die.

と告げてゐる。この見地よりする時、特にこの靈肉の争闘に關するテニスの個人的經驗の全量を示すものとして、既に引照したことがある「進化論者によりて」と云ふ詩が特殊の意義を有することゝなるのである。この詩に於て彼は八十の老齡に達しながら、自己の長い戦闘の生涯を顧みてその成果をかく述べてゐる。――

私は齡ひの雪の積む所まで登つて來た、そして私は今過去の野を打ち眺める、

そこは私が屢々低い慾望の泥濘の中に體ごと沈んだ所だ、

然し今は私は獸の叫びを聞かない、人は終に靜かな境に達してゐる、

彼は彼の生涯の丘に立つて、更に高い丘を瞥見する、

I have climb'd to the snows of Age, and I gaze at a field in the past,

Where I sank with the body at times in the sloughs of a low desire,

But I hear no yelp of the beast, and the Man is quiet at last,

As he stands on the heights of his life with a glimpse of a height that is higher.

これが「テニス」にとつては靈との間斷なき争闘の謎を解く答であつた。彼が「イン・メモリアム」に述べてゐる様に、人生の役目は唯人間に自己を知らしむるのみでない。人はこの地上の學校に於て他に學ぶべき更に大なる教訓を有してゐる――それは自己の行爲と自己の選擇の結果を通じて、各人が己の永久の運命を決する絶對の自由を有してゐることを認め、以て人格の深みを知ることである。そしてこれが、即ち靈の向上の追求に宿る榮光が、テニスの宗教的熱情の主調で

あり、又彼の詩の主調でもあつた。彼は常に自ら云へる如く閃光の導きに従ふかの豫言者マーリンであつた。時として彼はこの榮光を、彼の初期の詩に見る如く、追求の困難と失敗の苦痛を事ともせぬ青年らしい元氣な調子で歌つてゐることもある。また時としては人生のより深い經驗とその争闘に關するより進んだ知識が彼に齎した沈痛な色彩を以て之を歌つてゐることもある。

それらの初期の詩、即ち理想の追求に伴ふ間斷なき勞苦を知らないで、只すぐれたる青年の熱烈な喜びと愉快な望みをのみ知つてゐる詩人によつて、この主題が取扱はれた詩の中に、「航<sup>ザグホエイガ</sup>海」と「ユリツシーズ」とがあるが、二つとも一八四二年の詩集のうちには收められてゐる。前者は青年の立場から見た人生の美はしい比喩詩であつて、靈的な事物に對する若々しい歸依の心に満ちてゐる。

吾々は港の口に搖れてゐる

ペンキ塗りの浮標をあとにした、

そして南へと速かに走りながら

吾々の心臓を喜びの思ひに氣の狂ふばかり踊らせた、

打ちひらいた海に、うねつた岸に、

あらゆる景色や音の活き／＼としてゐたこと！

吾々はこの楽しい世界が圓いものだと言ふこと、

そして吾々はいつまでも船海を續けることが出来るのだと言ふ事を知つてゐた。

We left behind the painted buoy

That tosses at the harbour-mouth ;

And madly danced our hearts with joy,

As fast we fled to the South ;

How fresh was every sight and sound

On open main or winding shore !

We knew the merry world was round,

And we might sail for evermore.

南の方へと美はしく香しい島々に沿うて彼等は走り、また再び北へ向つて極海の氷の間を進んで行つた。そこには新しい星が水平線の上にさし登り、裸々たる月影は遠く住家なき海の波立つ野

*The houseless ocean's heaving field.*

を横ぎつて走つてゐた。彼等はまた楽しい家々、妖精の住ふ國々を過ぎ、咲き匂ふ花と露はな手足が肉感の悦びに人を誘ふ魔女の島をよぎつた。然し彼等は終に一度も帆を捲き上げたり錨を投げたりしなかつた。

それは一つの美はしい異象<sup>グレイション</sup>が絶えず

廣漠たる海を晝も夜も走つてゐて、

常に吾々はその異象の行く所に従ひ、

彼女の速やかな足に追ひつかうとつとめたからである。

彼女の顔はいつも見えないで、

遙かな水平線の方へ固く向けられてゐた。

然し誰も彼も皆咬いてゐた。「おう、わが女王、

私はお前を私の物にするまでお前について行く」と。

*For one fair Vision ever fled*

*Down the waste waters day and night,*

*And still we follow'd where she led,*

*In hope to gain upon her flight.*

*Her face was evermore unseen,*

*And fixt upon the far sea-line;*

*But each man murmur'd, "O my Queen,*

*I follow till I make thee mine."*

時として彼女は「道徳」の姿をしてゐることもあれば、時としては「知識」の姿を、「希望」の姿を、或は「自由」の姿をしてゐることもあつた。然し彼女がどんな姿をしてゐても彼等は彼女のあとに従ひ、烈しい海の風をも恐れず自然の法則を事ともし

なかつた。終に彼等は老齡の冷たい國に達した。運轉手は盲目となり、船長は跛となり、乗組員の半数は或は病み或は死んだ。而して船は益々先へくと進んで行つた。そしてその航海者等は追求の思ひを叫んでやめない。

盲目とならうと、跛とならうと、病氣であらうと、元氣であらうと、

吾等は前に飛んで行くものゝ後を追つて行く、

吾等はこの楽しい世界は圓いものだと言ふこと、

而して吾等はいつ迄も航海を續けられるのだと言ふことを知つてゐる。

But blind or lame or sick or sound,

We follow that which flies before :

We know the merry world is round,

And we may sail for evermore.

是がまた彼の他の詩「ユリツシーズ」の精神である。この詩は作者の告ぐる所によれば、アーサー・ハラムの死後間もなく書かれたもので、「突進して生の戦を挑むべき

必要を恐らくイン・メモリアムに於けるよりも一層率直に」表はしたものである。それは古へのユリツシーズ物語である。彼は岩より成る故郷の島に平和の三年を送つた後でも尙

落ち行く星の如く知識を追ひ、

人の思想のいや果の彼方までも至らん

望みに

in desire

To follow knowledge like a sinking star,

Beyond the utmost bound of human thought.

あくがれる。そして水夫達を呼びあつめて今一度彼と共に「暗く廣い海」を航せんことを命じる。その時刻は夕である。彼等にとつても生の夕である——けれども老齡が尙ほその働きを有してゐる。即ち彼は彼等に示して云ふ。

光は岩からまたゝき初める、

長き日は盡さる、静かな月は昇る、海は  
數多の聲をあげてあたりに吼える。來れ、我が友。

The lights begin to twinkle from the rocks :

The long day wanes : the slow moon climbs : the deep

Moans round with many voices. Come, my friends,

彼は叫ぶ——

今から新しい世界を尋ねるも遅くはない。

舟を押出せ、順序よく席をとり、

とくろく波のうねを漕げ。我が目的は

日の没する彼方、すべて西方の星の水に入る彼方へ、

我が死するまで航海をつゞけるにある。

'Tis not too late to seek a newer world.

Push off, and sitting well in order smite

The sounding furrows : for my purpose holds

To sail beyond the sunset, and the baths

Of all the western star, until I die.

然しこの様に追求の喜びとすべてのその高い情熱を想像に富んだ筆を以て寫すと共に、テニスンはこの主題の消極的方面に對しても決して盲目でなかつた。彼が初期の作である三部詩にもまたその後につつた「アイデルズ」の中のある篇にも、靈的異象の實在を疑つて之を嘲弄輕蔑の對照となし、或はその美と魅力を見ることが出来ない

でその追求をやめて徒らに感覺的快樂と肉慾とに耽る者の運命を、恐ろしきばかりの眞實を以て描寫した。彼は更にその道義的目的の緊張を大にし、而も藝術の限界を超越ることなしに、「藝術の宮」(一八三二年)に於て、藝術の爲めの藝術と云ふ主義に身を擲てる人に伴ふ恐怖や悔恨や皮肉な氣持や絶望の思を描き、「ロトスイターズ」(一八三二年)に於ては、感覺の刺戟をのみ求むる者の懊惱や放逸を描き、同時に「罪惡の幻象」(一八四二年)に於ては、快樂の生涯の恐ろしき結果を描いた。第一の「藝術の宮」

にあつては、主題とする所が殆んどその詩的繪畫の業と技巧のうちに隠されて見えなくなつて終つてゐる(この詩の各節は皆完全な風景又は人物の描寫である)——そしてそれは美のみを愛してその利己的な快樂にすべての高尚な性質の要素を犠牲にした罪深い靈魂の物語を説き、如何に憎惡と嫌忌がその靈魂に加へられたか、また自己輕蔑と深い悔恨の念がそれに與へられたかを述べてゐる。他方「ロートスを食ふ者」にあつては、テニスンは驚くべき象形之美と辭句の韻律諧和を以て、ロートスの國土を描き、すべての風景にロートスの花の惱ましい力が瀾漫してゐる様を寫してゐる。この悦しい國の眞中に彼は航海者等を安逸の姿態に置き、彼等の既に「ロートスの蜜あまき果實」を味ひ、今は勞働よりの卑しい休息を、「永き休息又は死、暗き死又は夢見る安逸」を望んでゐる様を説いてゐる。即ち感覺的安逸の害毒は次第に彼等の五官にまた彼等の優しい人間的情緒にその力を及ぼし來つて、終に愛する者との別離の悲しみさへ唯靜かに軟かき恨みの念とのみ感ぜられる様になつて來る。そして最後にその害毒は彼等の道義的性質にまで及んで、彼等の心のうちの勞働と高貴な事業とに對する

鋭く熱い喜びをすべて遲鈍にし死滅させて終ふのである。

然しテニスンが官能主義の極端な醜さを最も活き／＼した効果を以て描いてゐるのは「罪惡の幻象」に於てである。この詩に於て彼はジョージ・エリオットでも用ひざるな眞實を追ふ假借なき態度を以て、而も彼女より遙かにすぐれた靈的洞察と詩的精神を以て、自ら野獸の快樂に墮ち行くべき生命の歡喜に身を委ぬる者の厭ふべき運命を描いてゐる。既に「航海」の詩に於てもその船の乗組員の中に描かれてゐる一人は、「遠くを見ず、その眼は朦朧として居」て、従つて彼はその仲間等の追求してゐる異象は病める眼と愚かしい心の造り出した亡靈にすぎないと云ひ張つてゐる——

「愚人の船だ」と彼は嘲り且つ泣いた。

そして風凄しき一夜船の外へ

己の身を投げた。

“A ship of fools,” he sneer'd and wept.

And overboard one stormy night

He cast his body.

この詩人の考へによれば、絶望と好嘲シニスマとは常に靈的異象を無視する結果である。そしてそれがこの「罪惡の幻象」と云ふ恐ろしい寓意詩の主題であるのである。それは己の魂の翼ある馬に跨れる一人の青年の幻象である。馬は騎手の重みのために撓はりながら、彼は酒と宴うたげの歡びを求めて快樂の宮に駆け入つて行く。然しまもなく、そして殆んど氣のつかぬうちに、彼の快樂は粗野にして狂暴なものに墮ちて行き、終にすべての彼の享樂の力は滅びて終ふ。而も焼けたゞれ疲れ切つた慾望は尙ほ愈々強烈醜惡な刺戟を求めてやめない。彼は靈のすべての純な喜に、また山岳と朝の空とのすべての輝やかしい美に盲目となり、重く形なき蒸氣の色もなく冷たく次第に我の身を包まんとするをも意にとめない。好嘲の心と絶望とは彼の性となり、人生と人格に於ける總ての高く聖なるもの——愛眞理道德名譽友誼——に對する輕蔑と善の全的な侮蔑に陥つて終つた。彼は己のかゝる墮落をも顧みないで、古い徹の生えた様な歌を歌つてゐる。それは生の空虚と自己の汚名に對する一の祝盃である。

碗をみたせ、盃をみたせ、

人の世の様々な出來事はみな、

塵に過ぎぬ。それは吹き上げられては

またそつと沈んで終ふ。

Fill the can, and fill the cup :

All the windy ways of men

Are but dust that rises up,

And is lightly laid again.

終に神秘な山の頂が現はれる。そして三つの聲が曙の薄明から聞えて来て、下級な生物の形に變りつゝある人と馬の屍體の腐敗の膿に満ちてゐる入海の上に響き亘る。その聲の一つは判決を宣べてかく云ふ——

見よ！ それは時と共に衰へ来る

感覺によつて復讐せられた感覺の罪であつた、



Behold ! it was a crime

Of sense avenged by sense that wore with time.

第二の聲はこの地上の裁きの判決を抑揚ある強き語調を以て續け云ふ——

感覺の罪は

害心の罪となつた、そして共に罰せられる。

The crime of sense became

The crime of malice, and is equal blame.

第三の聲は人間らしい憐みを以て叫ぶ——

彼はその力を全く用ひ盡した譯ではなかつた、

尙ほ残る良心の微粒は彼を不安にした。

He had not wholly quenched his power ;

A little grain of conscience made him sour.

單純な物質的法則の作用に對する地上世界の識別はこの範圍にまで達するのであ

る。然しテニスンはこの事件を地上の判廷の最後の宣告に任すのを以て満足することは出来なかつた。彼にはまだ恐ろしい疑問が残つてゐる。それは彼が犯した道德律とその道德律の設定者である神とに對する罪ある魂の關係である——それは彼の心にとつて常に神秘に包まれてゐた問題であつた。それ故に第四の聲は山の頂に向つて「望みがあるか？」と叫ぶ。

それに對して答へがその高地から響いて來た、

然しそれは誰にも解らぬ言葉であつた。

そして遙かなる光仄く涯に、

神は自ら崇嚴な薔薇色の曙を造つた。

To which an answer pealed from that high land,

But in a tongue no man could understand ;

And on the glimmering limit far withdrawn

God made Himself an awful rose of dawn.

その主題に於ては是等の初期の詩に甚だ近いけれども、その詩境は遙かに廣く、想像的靈的の洞察の更に深いものとして、唯物論との論争の時代に作られた數個の詩がある。是等の詩に於て彼は、唯物論的な世界觀の推論を個人の行爲の規範とする時、人間の情操と感情に如何なる破壊的な結果が齎らされるかと云ふことに對する彼の感情を描いてゐる。是等の詩の二つ、即ち「小兒病院に於て」(一八八〇年)と「五月の希望」(一八八二年)とは、説話の劇的習作であつて、劇的原理が終始守られてゐねばならぬ様な作である。彼等は多少なりとも唯物的な人生觀を抱いてゐる人々を描寫してゐるが、只注意すべきは是等の描寫は性格の想像的研究であつて、そのうちに現はれてゐる粗野な唯物論や麻痺せる感情や磨滅せる道德感、原因結果の關係を示すよりもその物語の全體の觀念を形成する要素として描かれてゐることである。まことに彼等のうちの一つの例即ち「小兒病院に於て」の詩の中にあるあの有名な専門醫をとつて見ても、この人の眞の個性と云ふものが出てゐると云ひにくい。唯彼を叙述する看護婦の目に映じた限りの彼の性格の概念が興へられてゐるのみである。それにも

拘らず是等の詩は、テニスンが唯物的哲學に含まれてゐる原理の實踐によつて生ずる道德上の結果に對して有してゐた想像的感情的な強い洞察を示したもので、そこに直接的な價值を有してゐる。そして彼は個人が唯物的な人生觀を採用する時道德上の墮落が避けられないと云ふ事實を主張するに、稍々緩和な態度をとつたけれども、上にも説いた如く、純粹な唯物論の傾向は、確立した社會制度と宗教的還境によつて制肘せられない時は(否制肘せられても永い時日の間には)、是等の詩に描かれたと丁度同じ様な性格の人間を作る様になるものだとすることは、慥に宗教と道德の關係に對する彼の觀念の論理的推論である。

「小兒病院に於て」は感動的な小さな詩で、この偉大な詩人が人生一般の事相やその瑣細な或は重大なすべての關係を取扱ふ場合常に吾等に示す優しい人間味に富んだ同情の念がこの詩にも十分に満ちてゐる。然しこの詩の興味は、上にも述べた如く、その中に表はされた性格の型に存してゐる——即ち一方には基督の精神を以て病室に働いてゐる看護婦と親切な年とつた醫者とがあつて、他方のあの有名な醫者と好個の

對照をなしてゐる。この後の方の醫者は

佛蘭西その他の國々の外科學校で修業したて

*Fresh from the surgery-schools of France and of other lands.*

の男で、その看護婦の優しい心から見ると、患者に對するすべての優しみや同情の念を失つて終つてゐる様に見える——

「私の考へではあの方は死人にでも冗談を浴せかける様な人でした、

そして今迄自分に馴れて膝先でじやれてゐた犬を生きながら切りさいなむ事の出  
来る様な」

“I could think he was one of those who would break their jests on the dead,

*And mangle the living dog that had loved him and fawn'd at his knee.*

とその看護婦は云つてゐる。彼の眼付や聲音にはちつとも親切な情が見えない。ある時その看護婦が回復の望の絶えた病人の上に俯向いて小聲で祈禱をして「主イエス」の名を呼んでゐると、彼は荒々しく彼女をつきのけて何か半ば獨語の様につぶや

た。然し彼女は彼のかう言ふ言葉を聞きとることが出来た。

「それはいゝ事だ——たゞ主イエスの御代は終つたんだよ」

“All very well—but the good Lord Jesus has had his day.”

「五月の希望」の詩に於ては、テニスンはその劇詩の背景としてイングランドの田舎の村落のすべての質朴な生活の有様を描いてゐる。そこには過去の信仰と傳説がその柔らかな權威を保つてゐる。そこには人と人を結ぶ親切な感情が自然な流露の姿をもつて利己心の爲めに混濁されてゐない。そこには代々傳へて來た主人と召使との親和がまだ深く純に保たれて居る。そこには田舎人らしい友情や近隣を愛する心が破られないでゐる。そこには婚姻による結合と家庭的感情の神聖なことがまだ重んぜられてゐる。そして田畑に働いてゐる戀人同士の無邪氣さと優しい満足の氣持とは乾草を造る人達の歌ふあの美しい歌に述べられてゐる——

わしとサリイはね、不實しまいと云ひかはしたよ、

互に不實は決してしまい、どの様な難儀が起らうと、

日が暮れて

家へ終ひの荷を出すまでは。

For me an' my Sally we swear'd to be true,

To be true to each other, let 'appen what maay,

Till the end of the daay

And the last löd hoäm.

この様な背景の上に、テニスンはフィリップ・エトガアの物語をのべて、唯物論の主旨が人間の行爲の規範となる時、どの様な結果を齎すかと云ふことを委細に描寫してゐる。フィリップ・エトガアは何等確固たる信念を持たない男で、彼が唯物論を採用したのも唯自己を辯護する便宜な道具として用ひたのである。然しエトガアが彼を愛し彼を過信した少女に與へた耻辱不名譽、及びその結果として彼女を大切にしていた總ての人達にかゝつて來た災厄、さう云ふものを描寫するに當つて、テニスンは驚くべき程想像方に富んだ洞察を以て、唯物論的哲學の教義に潜んでゐる家庭と聖い愛

情とに對する危険なる要素を剔抉してゐる。そして同時にエトガアがシニジズムと悔恨に陥る経過を説き、彼を襲つた良心の最後の懲罰を説くに當つては、テニスンはすぐれた劇的技巧を用ひ、かの哲學が人間の本性のすぐれた要素を到底満足せしめ得ないことを、強く感情に訴へる力と効果を以て説き示してゐる。テニスンがこの主題を解明する爲めに用ひてゐるものゝなかで、このエトガアの良心が境遇と悔恨のために主觀的に轉化して行く有様ほど、劇的にすぐれて居りその作の目的によく叶つてゐるものはない。この青年が自己の正しきことを自ら證明せんと努力せる結果、終にそれに傾倒するに至つた唯物論的的人生觀が、人間の生活と性格に如何なる内的關係を有してゐるかと云ふことを、青年自ら正確な論理を以て解明して行く様にこの詩は書かれてゐる。

既に彼が舞臺に初めて現はれる時からして、彼は自分が誘惑した少女を見棄てようと決心してゐる。そこで彼は本を讀んでゐる――

俺を平氣で彼女を捨てる事が出来る程無情なものにする爲か？

To steel myself against the leaving her?

と彼は自分に問うてゐる——その本の著者は、「簡素な文體と嚴密な論法との魅力」を以て、殆ど人間と云ふものは「感覺の自動的連續」であると云ふことを證明せんばかりに論じてゐるのである。青年はかう思ふ、若しもこゝに書いてあることが眞なら、明らかにかう推論出来る筈だ。即ち——

それなら人間は感覺の外何物の爲めに生きようぞ、  
愉快な感覺の外?

What can a man, then, live for but sensations,

Pleasant ones?

神々は消えて終つた。自然は盲目である。若しも人間は他の者の苦痛を侵さなければ快樂を享けることは出来ぬと云ふなら——

よし——それならそれは又「自然」の歩む路ではないか、

「生物」なる物が生じたその曉からの——それは「自然」が

それによつて美を増して行く主要の法則ではないか——

即ち「自然」の蠅共が互に殺戮し合はねばならぬと云ふのは?

Well—is not that the course of Nature too,

From the dim dawn of Being—her main law

Whereby she grows in beauty—that her flies

Must massacre each other?

愛に就いては彼はそれを唯肉の親和に過ぎないと見、結婚は舊弊な傳説だと見、花嫁の面被<sup>ヴェール</sup>や指輪は教會の單なる裝飾の様な物だと見る。

若し吾々が自分を「自然」よりもすぐれた高い物に

しようなぞと力まなかつたら、吾々は

こんなに美しい花の中で蜜を吸つてゐる

蜂の様に幸福なものとなれるだらう

if we did not strain to make ourselves

第三章 唯物論に對する答

Better and higher than Nature, we might be

As happy as the bees there at their honey

In these sweet blossoms.

道德をも亦彼は單なる因襲だと見る。それは

或る時代の惡徳は

他の時代では美德とすることがある。そして惡徳と美德は

唯、己と云ふものゝ二つの假面に過ぎなし

one time's vice may be

The virtue of another ; and Vice and Virtue

Are but two masks of self.

から。

然しエドガアは、この強固なシ、ニシ、ズムの防禦の蔭に自分を隠さうと努めたけれども、良心の痛みを全く脱れることは出来なかつた。自己の狂暴な行を責めて呼號する

高貴な本能の聲を黙せしむることは出来なかつた。彼の性格やその奉ずる淺薄な哲學にも關せず、悔恨の情が眼ざめて來た。そして初めのうちは彼は唯今までの惡行の償ひをしようと云ふだけの望みに従つたのであつたが、終ひに彼が自己の眞の姿を顧みる様になつた時、彼は自己のあまりな醜さを感じて、それに壓倒せられる様になつて來る——この個所でテニスンの劇的洞察はまたそのすぐれた眞實の力を示してゐる。即ちエドガアの本性の最もよき部分から發出して來る是等の感情そのものが、彼を矛盾の渦中に巻き込むことゝなるのである。彼は自分の採用した哲學によつて表はされてゐる遺傳と云ふ酷薄な法則に自己の結びつけられてゐることを今更のやうに感ぜしめられる。

おう、我が神、若し人は唯

必然に流行くべき感覺の流れであるなら、——

もとより騒宴のあとには反動が續かねばならぬが——けれども——

何故彼は後悔するのか、自分が運命の鐵の溝の中で

動いたのに違ひないと云ふことを知りながら？

それでは悔恨も運命の一部分であるのだ。

自然は虚言者であつて、吾々に自然自身の誤りに對して、  
罪を感じしむる者だ。

.....

おう、この吾々の生れた人間の家は、

死んだ者の死んだ熱情の

亡靈に住まはれてゐる、

そしてその亡靈共は吾々の肉を再び身につけて

吾々を混亂の境に陥れるのだ。

O my God, if man be only

A willy-nilly current of sensations—

Reaction needs must follow revel—yet—

Why feel remorse, he, knowing that he *must*, have

Moved in the iron grooves of Destiny?

Remorse then is a part of Destiny,

Nature a liar, making us feel guilty

Of her own faults.

.....

O this mortal house,

Which we are born into, is haunted by

The ghosts of the dead passions of dead men;

And these take flesh again with our own flesh.

And bring us to confusion.

エドガアは浮薄な男ではあるけれども、而も彼が自己の心の前に、この人生觀の中に含まれた總ての醜い恐ろしい矛盾を解明して行く段階は、正確な必然な論理の道に

叶つてゐる。

時として私はかう云ふことを疑ふ、

人間がすべての彼の古い世界の信仰、青春の花が

凋んで實もなく散つて終つたことを

たしかに知り得た時——その時

吾々は皆、悉く、死を欲すると云ふよりも

寧ろ生を厭離する烈しい情に

捕へられないであらうかと——

Sometimes I wonder,

When man has surely learnt at last that all

His old-world faith, the blossoms of his youth,

Has faded, falling fruitless—whether then

All of us, all at once, may not be seized

With some fierce passion, not so much for Death

As against Life!

之より外の場所で、テニスン<sup>テニスン</sup>は之より一層直接にこの唯物論の純粹に主觀的な關係を表現せんとしてゐる。それは不信仰なるものに關する消極的な經驗であつて、信仰より流れ出る積極的な精神的満足と對比すべきものである。例を挙げると彼が「絶望」<sup>ザスベア</sup>と云ふ表題を與へた詩の如きはそれであつて、之は一八八一年の十一月號の十九世紀誌上に初めて發表せられたものであるが、唯物論によつて神と靈魂の否定された荒涼たる有様と、而もその哲學が人間の精神的欲求や希望や確信を到底満足さすことのできない醜惡な實狀に對するこの詩人の感じを、劇的形式に包んで、鮮やかに表現したものである。是までの様々な形式の宗教的眞理が、如何に人間の本性の深い欲求に適合しそれを満足せしむることが出来たかと云ふことを檢覈して、テニスンは當時行はれてゐた神の觀念は、人間のこの高い希望や確信に本質上撞着するものであるとの理由により、その虚偽であることを痛感した。即ちこの神の觀念は實際不愉快な觀念で



はあるけれども、尙多數の人には露骨な無神論に代へ得べき唯一可能の説であるとして採用されてゐたのである。彼等はその心の一番深い奥所に於て、科學の強制する様な無神の世界觀には満足することは出来なかつたが、同時に一方、神を無限の憎悪と残忍を有する者と見えしむる様な宗教の教へにも満足し得なかつた。そして彼等の多數はこの詩の中の主人公の如く、「吾人の人間的な兄弟であり友人である基督から去つて終つた。」

それは彼は救ひのない終りのない地獄を説いてゐたから、否、説いてゐる様に見えたから。

*For He spoke, or it seem'd that He spoke, of a Hell without help, without end—*

そして彼等は深い絶望の中に陥つて終ふ。而もその絶望の中には、結局凡ての否定にも關せず、人間の心の強い欲求に應じて一つの神が愛と憐の姿をもつて現はれるであらうと云ふ望みが、極めて微弱ながらもまだ消へないで残つてゐる。そしてこれらのすべての有様をテニスンはこの詩に現はしてゐるのである。

然しながら吾々が今こゝで考察しようとするのはこの主題の只一つの方面のみである——即ちそれは唯物的綜合論の主觀的經驗である。テニスンはこの詩に於て、他の何れの詩にも見ることの出来ない程の強い力を以て、神の無い世界の悲惨な星學を説いてゐる——巨大な機關車の様に運轉して彼の手足をひき切つて終ふ宇宙の無生命な廣大無邊な力の中にあつて、人間が恐ろしい放恣と極端な絶望に沈むべき有様を強く描いてゐる。また、愛や徳や其他すべての人類の高貴な本能や熱望は無益な空しいものであると云ふ恐れを持つ時、その人の存在はいかに望のないみじめなものであるかと云ふことを説き、そして最後に、テニスンの考へによれば、神と來世に對する信仰が破壊せられて人間の心から根こぎにせられた時、その跡から生じて來る「人生に對する烈しい反感」に就いて説いてゐる。

181

お、吾等、無の憐れなる孤兒——寂しき岸に只一人——  
その生めるものを知らざる痴かなる自然より生れ出でたる者！

*O we poor orphans of nothing—alone on that lonely shore—*

Born of the brainless Nature who knew not that which she bore!

これ恐るべき孤獨にある人の叫びである。

そして無限の宇宙の太陽は空中に照り輝き、

神の焔の如き火を以て閃いた、されど吾等はその光の虚偽なることを知つた——

彼等は死を知らぬ望みをもつ如く輝かしい——されど彼等がどんなに光り輝いても、

彼等の周囲をめぐる暗い小さな世界は皆吾等の世界と同じく苦惱の世界であることを知つた——

182

上なる空にも靈魂はゐない、下なる地にも靈魂はゐない、

それは悲しみと苦しみの文字を記した火焔の巻物である。

And the suns of the limitless Universe sparkled and shone in the sky,

Flashing with fires as of God, but we knew that their light was a lie——

Bright as with deathless hope——but, however they sparkled and shone,

The dark little worlds running round them were worlds of woe like our own——

No soul in the heaven above, no soul on the earth below.

A fery scroll written over with lamentation and woe.

斯くの如く物質的の災厄に襲はれ、彼の優しい愛情は裏切られ、道徳と真理の實在に對する感じを失つて終つた時、感情の必然な論理として次の如き執拗なる疑問が彼の心に迫つて来る。

何故吾等は一時間でも苦しみを、一瞬間でも痛みを耐へねばならぬのか、

183

若し人は永久に死んで終ふものなら、若しすべての彼の悲しみは空しいものなら。

そして終に家のない天體は沈黙の空間の中に押進められ、

永久に消滅し行く人類を生まん母もなく、

蛆虫はその最後の者を食ひ、そしてその蛆虫の最後の兄弟は

死滅した地球の岩の中に残された化石した骸骨から這ひ出て終ふ様になるのならば？

Why should we bear with an hour of torture, a moment of pain,

If every man die for ever, if all his griefs are in vain,

And the homeless planet at length will be wheel'd thro' the silence of space,

Motherless evermore of an ever-vanishing race,

When the worm shall have writhed its last, and its last brother-worm will have fled

From the dead fossil skull that is left in the rocks of an earth that is dead?

こゝにテニスの唯物論に對する答の全體が現はれてゐる——即ち眼に見えざる物の實在に對する彼の強い感覺、人類の最深の信念と最高な熱望によつて試験さるゝ時唯物的綜合論の如何に空處なるかと云ふ事に對する彼の生とした感情と想像に富んだ理解、そしてあらゆる否定的の議論の存在にも關らず、精神的の主義の中にのみ生活と行爲の満足すべき基礎が見されると云ふ事に對する彼の搖がない信念、これらの中にテニスの答は存するのである。最後に、この宗教的哲理は最も特異的な形式と精神を以て、且つ反對論の論旨に對して最も強硬な反駁を以て、一八八五年に發表せ

られた「古ゼイ・エンシユセント・ゼイザ聖」の中に表現せられてゐる。

この詩に於ては二人の人物が吾等の前に動いてゐる。その一人は豫言者である——彼は人生の騒音と俗界の紛雜に倦いて、人寰を逃れてその最後の一年を山岳の間に聯想のうちで過さんとする。他の一人は青年である。彼はその老人を愛し敬つてはゐたけれども、その弟子と云ふ譯ではなかつた。どちらの人物も嚴密に劃然たる個性は有してゐない。その青年は唯その聖者が話をさしむける都合のいゝ對話者と云ふ様なものである。然し彼は一個の不可知論者である——この點でその詩の作られた時代に於ては珍らしくないタイプである——そして彼の人生と人格に對する觀念は、唯物論の論旨と、その論旨を實行するがために必然陥らねばならぬ精神の弛廢と緩漫な禁情主義とによつて、濁らされてゐる。一方その聖者は七十六歳のテニスの思想信仰を人格化したとも云ふべきものであり、信仰に關する彼の最も直接な個人的な見解の表現である。彼はこの詩を説明してかく云つてゐる、『この詩は極めて個人的なものである。『信仰』と『過去の熱情』とに關する個所は特に私自身の個人的感情である。』

この對話の初めに於て、老人は洞窟の前に立つてゐる。「そこからは豊かな泉が流れ出てゐる」。老人は美しい象徴をもつて、青年に人間の靈の高い神々しい起源に關する己の落ちついた信念を述べる。

この豊かな水はあの暗い洞から

流れて来る様に見えるかも知れない。然し源はそれより高い、

あの半リーグも空中にある頂きだ——否それよりも高い、

その頂きを隠してゐる雲だ——それよりも高い、雲が

それによつて造られ、そこから降つて來たあの天だ。

力は高い所から來るのだ。

*This wealth of waters might but seem to draw*

*From yon dark cave, but, son, the source is higher,*

*Yon summit half-a-league in air—and higher,*

*The cloud that hides it—higher still, the heavens*

*Whereby the cloud was moulded, and whereout*

*The cloud descended. Force is from the heights.*

然し青年はその年老いた友の美しい信仰を、まだ證明されないものでありまた實際證明することは不可能なもので、従つて信ずべからざるものであるとして排して終ふ。

彼は云ふ、「然し今日の人間は

昔からあり來た様に

空想の痴者なのだ。

その名前のない支配の一つの力、或は多くの力と云ふものは、  
今まで聞こえたことも見えたこともないのだ。」

*is fancy's fool*

*As man hath ever been,*

*The nameless Power, or Powers, that rule*

第三章 唯物論に對する答